

第14章 人間の内と外とあわい（間）に潜む“未知の未知”の力（後編）^{1 2} ——【第2部 認識論】・【第3部 実践論】——

村瀬智子（日本赤十字豊田看護大学）・村瀬雅俊（京都大学基礎物理学研究所）

ある個人としての修行者に即してみるならば、発心した時が修行のスタート地点であり、その時、「さとり」というゴールを目指して修行が開始する。しかし、修行を続けていったある時に、自分がゴールとして目指していたモノは、実はすでに与えられていた・・・ことに気づく。当初、今の自分からは遠く離れた場所にある手の届かない理想と見えていたものが、実は足下にあったことがわかるのである。

頼住光子『正法眼蔵入門』角川ソフィア文庫, 2004, 26 頁

私は議論を二つの両立しない理論の選択の問題にあてはめ、同一の基準では測れないような見解を持つ人たちは異なった言語集団の成員と考えられ、彼らの間のコミュニケーションの問題は翻訳の問題として分析できる、という結論に持って行くつもりである。

トーマス・クーン『科学革命の構造』みすず書房, 1971, 198 頁

“森と木”をとともに知覚する包括的知覚は視覚的創造力の統一をもたらし、美術の、また創造性の奥底にある核心をもたらします。

ベティ・エドワーズ『内なる画家の眼』エルテ出版, 1988, 148 頁

¹ 「複雑な世界」を「複雑な人間」が「複雑な方法論」を用いることで、逆説的にすべてを単純に統一的に理解できる。ここに、二十年の歳月を経て構築してきた「大統一生命理論」の基本原則がある。それは、この理論を創造する過程において必要となる方法論でもあった（村瀬、村瀬、2020a,b）。その「複雑な方法論」こそ、複数の逆説（パラドックス）、異なる概念間の類推（アブダクション）、多様な時間・空間スケール（フラクタル）を同時に駆使することである。実は、この「複雑な方法論」に秘められた三つの特性は、冒頭に引用している文章の三つの主題——すなわち、「目指していたゴールはすでに与えられていた」、「二つの両立しない理論間の翻訳」、「森と木の両方を捉える包括的知覚」——と対応している。

² 西洋科学が基盤とする二項対立的論理（「A である」と「B である」の二項対立）は、主体と客体を分離することによって、確かに客体の現象を明らかにすることができる。ところが、客体の本質は見過ごされてしまう。主体が客体になりきり、両者間の循環が繰り返され続けること——すなわち、「一人称的な主体（内）」と「二・三人称的な客体（外）」の永続的な互換性を保証する「自己・非自己循環過程（間）」（前編参照）こそ——が、客体の本質を捉えるには欠かせないからである（本稿【コラム7 自分が大地になる】参照）。

創造された芸術作品・文学作品・科学的成果である外面的な客体は、目で見ることができる。しかし、その外面的な客体が如何にして内面的・直観的に捉えられ、創造されるに至ったのかという創造過程を、結果として出来上がった外面的な客体だけから理解することは困難である。思いもよらない“未知の未知”や“既知の未知”の世界への気づき（前編、3.2, 3.3 節）、そして音のない「沈黙の世界」への気づきこそ、「創造性」に必要不可欠である（ピカート、2021）。本稿では、この創造性——すなわち、「発見的（ヒューリスティック）」な学び——について、論考していきたい。

【第2部 認識論】

創造性——すなわち、「発見的（ヒューリスティック）」に学ぶ——とは、一体何だろうか？
どうすれば、創造性を発揮することができるのだろうか？ライプニッツ（1646-1716）は、「発明それ自体よりも、どうしてそれが発明されたかを考えることの方が面白い」と明言した。激動の時代にあって、教室での学びばかりでなく現実世界をより良く生きるための学びへ、一人の学びばかりでなく他者と共創する学びへと、学びの場・方法・主体を柔軟に変容していく必要性がますます高まっている。

第2部認識論では、創造性の発露について、具体的に論考したい。

6. 創造性——すなわち、「発見的（ヒューリスティック）」に学ぶ——とは何か？

1922年12月14日、アルバート・アインシュタインは京都帝国大学において、文学部教授の西田幾多郎の依頼を受けて「如何にして私は相対性理論を創ったか」と題した特別講演を行った。これは哲学者・西田幾多郎の熱烈な希望によって実現したのである（西田幾多郎, 1984; 安孫子, 2006）。このように、発見的学びの方法を学びたいとの思いはすべての人々に共通している。研究の結果としての「相対性理論」についてではなく、それを創り出すプロセスについてアインシュタイン自らが講演したのは、43日間におよぶ日本滞在中で唯一の機会となった（図18参照）。



図18：アルバート・アインシュタインの来日（安孫子, 2006）より

左端は、西田幾多郎とともにアインシュタインの招聘に尽力した、物理学者・桑木彥雄

心理学者で発明家のエドワード・デボノ（2015, 36頁）は、『水平思考の世界』の中で次のように指摘する。「アインシュタインは、実験も行わず、新しい情報も集めずに相対性理論を生み出した。古い情報を新しいやり方で見つめた。彼の理論の正しさを裏付ける実験が行われたのは、後になってからのことである」と。その上で、「技術的発明や科学理論の提唱には、専門的知識だけでは不十分である」と説く。なぜなら、「新しいアイデアがもたらされるプロセスは、そのアイデア（の重要性）と切り離すことができる」からである。

言い換えるならば、専門科学をどんなに学んだとしても、新技術や新理論を簡単に創造できるとは限らない。創造性を発揮するためには、専門科学とは別の発見科学——前章と本章で展開している「複雑な方法論」——に習熟する必要があったからである（ポリャ, 1954）。

6. 1. 数学における二つの科学的側面

本節では、2000 年以上の歴史をもつ数学を具体例として論考を進めたい。創造的・発見的学びとは、数学を既に確立した固定的な体系とみなして、数学的知識や問題解法を熟知することではない。未知の事象を数学的に解明するために、既知の基礎的な知識を用いて新しい概念や原理・法則を創造する発展性、既知と新たな知を包括的に捉えて意味づけをする統合性、この「生きて働く」数学の魅力に共感して粘り強く考え抜く人間性が求められる。その意味では、数学の問題を検討することで、数学に限らずあらゆる種類の問題に共通した「創造的・発見的な学び」のプロセスを一般化できると期待される。

前章、3. 4. 節で述べたように、数学には二つの科学的な側面がある。一つは、ユークリッド幾何学 (BC330-BC275) に代表され、他の科学が模倣を試みてきた最初にして最大の「演繹科学」である。他の一つは、数学とともに長い歴史を持ち、数学的原理や概念を発見する方法や法則を学ぶ「発見科学」である。

発見科学は、デカルト (1596-1650) やライプニッツ (1646-1716) を巻き込み、数学・論理学・心理学・教育学・哲学にまたがる文理融合的学問として発展してきた。そして、現代数学教育学に至って、問題発見・問題解決の方法論を体系化する試みがなされてきた (クーラント, 1941; ポリア, 1954)。もちろん、問題発見に際しては、問題設定の妥当性や問題解決の方向性に対する見通しを立てることが重要である。なぜなら、問題発見の際に、すでに問題解決の方向性が直観的に捉えられている場合が多いからである³。その上で、問題解決に際しては、解決の正当性を確かな根拠から論理的に考察することが必要となる⁴。要するに、問題発見・問題解決には、直観や類推による飛躍を伴う推論、帰納や演繹による論理的な推論、解析による分解と構成による統合、これらの本質を客観的に捉える論理性を兼ね備えた上で、それらすべてを主体的・実践的に駆使する「創発の仕掛け」が必要である。

この発見学習を 30 年余り高等教育現場で実践した谷川幸雄 (2002) によれば、「発見された」知識は学問的には既知の概念である。つまり、厳密には「再発見」である。ところが、学習者自身にとっては「原発見」と同じ経験を辿ることになる。小さな発見をする度に、人間は歓びを感じる。それが内発的動機となって、より大きな発見を求めて新たな問題へと挑戦を続ける。ここに「学びと遊びの原点」がある (村瀬 ほか, 2017)。粘り強く考えた末に、問題が解決する。その体験を通して達成感を覚えるとともに自信がつく。同時に学問への愛着がますます高まり、さらなる成長が期待される。

「発見的な学び」とは、既にでき上がった体系として数学知識を表面的に学ぶのではない。知識が生成されていくプロセスに参加して、規則性・法則性・関連性を自ら発見する歓びに満ちた深い学びである。この創造的・発見的学びは、実際の研究でどのような形で展開してきたのだろうか？次に、ノーベル賞の発想について検討したい。

³ 次節で述べる「問題を終わり (結論) から考える」という“逆向き推論”は、問題解決の方向性として極めて有効である。ここに、原理や概念を発見する方法や法則を学ぶ「発見科学」の意義がある。

⁴ 問題解決では、解決の正当性を「確かな根拠から論理的に考察する」という“前向き推論”が有効である。ここに、ユークリッド幾何学 (BC330-BC275) に代表される「演繹科学」の醍醐味がある。

6.2. ノーベル賞の発想——問題が解けないことが「答え」であった！

数学を用いた問題解決によって科学は発展してきた。ところが、数学による問題解決が不可能なために、逆説的に科学が飛躍的に発展する“パラダイム転換”を起こした実例がある。1934年、湯川秀樹は原子核に働く強い「核力」を解明するために計算に明け暮れていた。ところが、当時知られていた原子核を構成する陽子と中性子だけでは、原子核に働く強い「核力」を数学的に計算できなかった。そこで、湯川は「問題を終わり（結論）から考える」ことにした。原子核において強い核力が働くためには、陽子でもなく中性子でもない「第三の未知なる素粒子が存在しているのかも知れない。その素粒子が核力を媒介しているのではないだろうか」。そのように、仮定してみたのである。

その結果、問題は見事に解決された。湯川は「中間子」の存在を予言したばかりでなく、「力は素粒子の受け渡しである」という革新的パラダイムを確立した。その点で、湯川の業績は今なお高く評価されている（九後, 2006）。



図 19：世界平和アピール 7 人委員会と日本学術会議の会合
1957 年に撮影された、湯川秀樹（左）と朝永振一郎（右）である。
写真は、京都大学基礎物理学研究所 所蔵

湯川秀樹は、後に次のように述懐している。「前提を認めれば、数学は論理に基づいて結論を導くことはできるかもしれない。ところが、前提が正しいかどうかは、数学をはなれて経験的に決定するほかない」と。結果ばかりでなく、結果に至る過程、そして前提の妥当性を「振り返る（省察する）」ことの重要性（ユーリア・エンゲストローム, 2018）を、湯川はすでに認めていたのである。

さらに、湯川は学生時代から朝永振一郎と切磋琢磨しながら学び続け、戦後日本の科学を世界に誇れる水準に押し上げた（図 19）。現代教育学の観点では、この革新的学びの飛躍とは、一人でできる学びから他者の助言に基づく共創的な学びへの飛躍である。この飛躍こそ、レフ・ヴィゴツキーが「発達の最近接領域」として説明している革新的学びの飛躍に他ならない（図 20）。

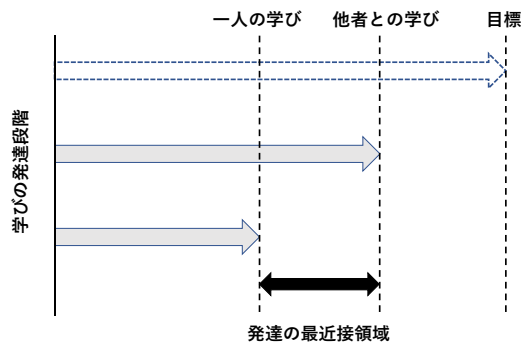


図 20：レフ・ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」

私たち人類は、生涯にわたって学び続けている。未だに誰も達成してことのない目標を設定すると、それに動機づけられて、学びがはじまる（上段 ⇒）。この学びの発達段階において、一人でできる学びもあれば（下段 ⇒）、他者と共創する学びもある（中段 ⇒）。ここで、一人ではできないが、他者となら共創できる学びの領域（最下段 ⇔）を、レフ・ヴィゴツキーは「発達の最近接領域」と呼んだのである。図版は、藤澤理恵（2019）を参考にして著者が作成した。

6. 3. 言語・数学と人間性との共進化——避けるべき共崩壊の危機

進化人類学者・ディーコン（1999）は、人類が言語を発明したという一方向的な見方ではなく、発明された言語からの影響も受けながら、人類と言語は双方向的に共進化したという魅力的な学説を提唱した。霊長類学者・山極壽一（2020）は、言語は重さもなく自由に持ち歩ける点で空間を超越し、物と違って朽ちることがない点で時間をも超越すると指摘する。その上で、言語を用いて物語を創り仲間と共有することで、空間的な関係に意味が与えられ、時間的な関係に因果的な解釈が見い出され、人間性が培われていくと説く。こうして人間性と物語の共進化が続く。ここに現代教育の基点を置きたい。なぜなら、この共進化が反転すると、「物語の消滅と人類の滅亡による共崩壊への危機」が懸念されるからである。

数学は日常言語と似ている。厳密さが違うだけである（ミラー, 1997）。そのために、言語について上述したことすべてが、数学にも当てはまることがわかる。そればかりでなく、数学における発見的学びの本質が、次節以降に展開する人類進化のいろいろな局面においても普遍性・必要性をもつことが理解できる。

確かに、数学は 2000 年以上の歴史を踏まえながら発展を遂げ続けている。その理由は、数学者や物理学者が、一旦解決された問題や解法を省察することによって、概念の拡張を試みてきたからである。例えば、1947 年を振り返ってみたい。当時、相対性理論と量子力学の統一を試みていた科学者たちは、電子の質量が数学的に解を持たないという理論的矛盾に直面していた。この状況を打開した朝永振一郎も、「問題を終わり（結論）から考えた」一人である。朝永は、計算できない電子の質量を実験によって得られていた実測値で置き換える「くり込み理論」と呼ばれる着想を得た。その結果、朝永は他の物理量を矛盾無く計算できることを示した。人間が数学的にすべてを計算する必要はなく、計算不可能なデータは自然から学んで、それを活用するという革新的“パラダイム転換”が世界に衝撃を与えた。手の打ちようもない困難な事態でも、解決策が見つかる「物語」を朝永は演じたのである。

6. 4. 発見科学と進化的認識論と生命理論の統一に向けての展望

数学者・ポリア (1954) は、発見科学の論点を踏まえた上で大胆な見解を強調している。「問題の種類に限らず——すなわち、数学の問題から日常の問題に至るまで——問題発見・問題解決の動機と手続きはどれも共通している」と。認識論的進化生物学者・リードル (1990) は、生物進化を適応過程と捉えた動物行動学者・ローレンツ (1974) の生態学的論点を踏まえた上で、生物進化の適応過程を問題発見・問題解決過程として一般化できる可能性を示した。私たち著者は、生命の一般理論として「自己・非自己循環理論」を構築してきた (村瀬雅俊、2000；村瀬雅俊、村瀬智子、2020)。これら三者を一つの全体理論に統合できないだろうか？

本節で述べた、ノーベル賞に繋がる革新的な“パラダイム転換” (第 6 節) から、次節以降に述べていく、漫画を読み解く技術の習得 (第 7 節)、ヨハネス・ケプラーによる惑星の運動法則の発見 (第 8 節) に至るまで、私たち人類は実に多様な問題に直面しながら、それらの解決を目指してきた。もちろん、現代文明から遠くはなれた原住民族“ブッシュマン” (第 9 節) の悲惨な事例もある。しかも、現代文明にあって新型コロナウイルス感染症によるポストパンデミック時代を迎えた今なお、私たちは“想定外問題”に翻弄され、問題発見・問題解決に苦慮し続けている。

この混沌とした時代にこそ、「学び方を学ぶ (learning to learn)」 (ドウアンヌ, 2021, 11 頁) という発見科学、それに加えて進化的認識論と生命理論とを統合する観点に立つことによって、問題や現象や状況の詳細によらない普遍原理の‘発見’が求められる。前編では、“創発の仕掛け”を試論として展開した。そのために、「一人称の主體的な自己 (内)」と「二・三人称の客体的な非自己 (外)」と「それらの対話的な自己・非自己循環過程 (間)」に基づく、逆説性 (パラドックス)・互換性 (アブダクション)・包摂性 (フラクタル) を仮定した。以下 (特に第 8 節) の論考に備えて、上記の (内)、(外)、(間) を“進化を経て遺伝により獲得してきた内的生得機能”、“成長・発達に欠かせない刺激の宝庫である外的環境”、“学習に不可欠な内と外の間働く循環過程”と捉え直しておきたい。

私たちは、生まれながらに生得的な認知的基盤を備えている。誕生前後に、どのような言語環境で育つかによって、母国語が日本語になる場合もあれば、英語になる場合もある、あるいは両親が異なる言語を話す場合には、バイリンガルにもなる。その後も、歩きはじめる、自転車に乗る、泳ぐなどのスキルを、生得的な認知的基盤と外的環境刺激、そして、私たち自身の強烈な動機付けによって学習していく。大人になっても、学びは続く。例えば、雅楽の修練は、宮内庁に楽師として入ってから七年間、一対一で練習するという (河合、2003)。譜面から学ぶのではなく、雅楽そのものから学ぶ。この‘現実’から学ぶ姿こそ、人類が進化を通して学び続けてきた学び方に違いない。「学び方を学ぶ」普遍原理は、‘自然な現実’に“既知の未知”として既に存在していたのである。私たちは「その状況を知らないことにさえ気づかない」という“未知の未知”の呪縛の中に在る (前編、第 3.2, 3.3 節)。

この段階で、「創造的・発見的な学習とは何か？」という問いに対し、「生得的な認知的基盤と外的現実世界からの刺激との共創 (内と外の間働く循環過程) に基づいて、「学び方を学ぶ」普遍原理を再発見し、更新し続けること」と答えたい。この学びの過程が、世代を超え、人種を超え、地域を超えて継続しつづけている。こうした観点に沿って、以下の論考を展開していきたい。

****【コラム5：リトルネロによる新しさの創発——反復に秘められた創造の原点】****

リトルネロ (ritornello) とは、バロック音楽によく見られる「繰り返し」形式を意味する言葉で、イタリア語の *ritorno* という「変わる」に由来する。反復していても、同じことだけが機械的に繰り返されるのではない。変化があり、新しさの生成があり、そのために創造的活動へと繋がる。特に、注目したいことは、「反復」を「再認ではなく創造的学習」の原点と捉える観点である。混沌とした時代にこそ、私たち人間は自身の経験に基づきながら、その経験の意味を解釈し直しつつ再構成していくことが必要だからである（佐藤ら, 2019）。

実は、本章でも三つの特性の「反復」によって、読者のみなさんに「新しさ」の創発を体験できるような仕掛けとして構成上の工夫を試みている。前編冒頭の三つの引用文は、三つの特性——すなわち、逆説（パラドックス）・転移（感染）・単位（自己完結）——を暗示している。そして、その意味を前編「はじめに」の最初にある三つのパラグラフにおいて、異なる用語を用いながら再解釈している。それぞれが、「ネガティブ・ケイパビリティ」・「パラダイム転換」・「双方向的対話（循環）」へと置き換わっていく。もちろん、それぞれの特性は、全体の一側面を捉えているに過ぎない。そのために、それらが独立には定義されず、様々な重なりがあることは言うまでもない。しかも、「全く考慮されることすらない」「未知の未知」を想定することで、「時間・空間・こころ」の広がりや深まりが可能となる。

全体をつかむには、論理ばかりではなく直感に頼らざるを得ない（ユング, 1999）。それではどうすれば、「全体的な理解」を得ることができるのだろうか。松長有慶（1989）は、「マンダラに見る内と外」と題した論考の中で、宇宙と人体の構造的相同性に着目した⁵。その上で、「我々の中に宇宙を呼び込むことで、逆にそれを全体の世界に帰すこともできる」と指摘する。小さな自分の宇宙が大きな宇宙へと拡張され、大きな宇宙が小さな宇宙に収斂されるのである。その運動を無限にくり返すことで、感覚の中でマクロとミクロが本質的に一つになる（前編、脚注3）。これが「全体的な理解」の方法と捉える。松長は、「ここまでしか論理化されていない」と謙遜するが、全体をつかむことができたとき、明確な目標に動機づけられて「未来共創」の路が拓かれることになる（村瀬、村瀬、2021）。

『新 失敗学』の著者・畑村洋太郎は、避けられない失敗の影響を減免する方法として、次の三つの重要な特性を指摘する。(1) 失敗や問題が起きた時点ばかりに注意を払うのではなく、未来に繋がる「時間」を意識すること、(2) 平時においては「想定外事態」をも考慮すること、そして(3) 明確で広い「視点」を持つことである。私たち著者が「時間・空間・こころ」の広がりや深まりと捉えた、三つの特性が異なる観点から繰り返されている。この繰り返しから——さらに、“未知の未知”や“既知の未知”の世界への気づき（前編、3.2, 3.3. 節）を得て——創造性と破壊性の両義的世界がどこまでも創発する（村瀬、村瀬、2022a,b）。

⁵ 松長によると、「マンダラは大宇宙の凝縮図であり、かつ小宇宙としての人間意識の投影である」という。人間にとって「外的」な存在を「内面化」し、それを再び「外面化」する。その運動を無限に繰り返すことによって、大きな世界と自分自身の世界とを一体化する。これが「全体的な把握である」と説く（前編、脚注3）。それは、主客分離前の幼児に見られる「主客が未だ未分」の状態ではなく、主客分離後に両者の統合をはたしたという意味で「主客が既に未分」の状態と言える（秋月, 1989）。

7. 漫画の極意——創造性リテラシー（創造性を如何に学び、如何に伝えるか）の自得——

前編で述べたように、「創造の瞬間」を外面的な言葉で説明することは不可能である。その理由として、「創造の瞬間」は外面的な形式をどんなに模倣しようと試みても達成されることはないからである（ヘリゲル、1981）。ところが不思議なことに、内面的なところが創造的に輝きはじめると事態は一変する。言葉や絵を外面的な道具として用いることで、「創造の瞬間」が見事に実践されて作品が創作されるからである。

実は、私たちは気づかずに「創造の瞬間」を日常的に体験している。その事例について、拙著『未来から描くケア共創看護学』（2021年、282-283頁）から引用したい。

2015年1月22日、筆者は、漫画家であり京都精華大学学長（当時）・竹宮恵子氏の講演を拝聴した。「誰も教えないのに漫画はリテラシー（読解・理解して記述・表現する力）を自然に育てる」と講演ははじめた。「漫画の極意は説明的でないのにちゃんと説明され、考えようとしなくていいのに考えさせられ、あくまで答えは読者が発見し、読者が必要とする結論に行き着く」。「読者が‘選び取る’形をとることは、実は漫画の中に隠された秘密兵器」とたたみかけた。

しかも、「勝手にグローバル」。つまり、「漫画は地域的・パーソナルなのに、言葉がわからなくても、漠然と理解できる」。「挿絵は理解につながり、リテラシーが起動する。意味を紡ぐ前にリテラシーによって理解が起こる。理解が次の意味を求め、文章にならないイメージの中で行動（動詞）につながっていく」。さらに、「読み解くのは自分自身だから、誰もが同じ読み方をしない。それは、自分の勝手に、そこに海外の読者も気づいた」。つまり、「漫画は双方向的メディア」。その上で、「児童のために教育的な漫画を作り、自国の言語に沿った漫画のリテラシーを育てて欲しい。本気でやれば、たった3年間で読者のリテラシーは育つのだから」と締めくくった。

竹宮恵子は「創造性」という言葉を一切使わずに、「創造性を理解し、表現するという創造性リテラシーが育てられる」と断言したのである。こうした観点から、私たちの文化・文明を眺めてみると、「創造性」という言葉を使うことなく、「創造性リテラシー」を継承してきた歴史が明らかとなる。

ここで注目したいことは、「創造性を如何に学び、如何に伝えるか」という創造性リテラシーが、状況次第で自然に創発してしまう点にある。エドワーズ（1988）【本稿、第4.2節】や【コラム6】で述べるロジャーズ（2000）の書籍は、創造性について書きながら同時に創造性を発揮している点で、二重の課題を追求した著作と言える。秘訣は、言葉や視覚・聴覚的手段（図・イメージ・芸術など）を外面的な道具として用いて、内発的に「創造の瞬間」を実践的に展開できるかどうかにある。ここに「漫画の極意」が秘められていたのである。その本質こそ、「学び」も「遊び」も「運動」も、他の「活動」も、どれもがまったく同じ内面的な興奮を伴うという点にある（村瀬、2017）。

本節で論じた「漫画の極意」としての「創造性リテラシー」にこそ、実は前編と本稿で論考している「創造の仕掛け」に共通する秘訣がある⁶。この秘訣への気づきによって、混沌とした現代を生き抜く智慧を自得できるに違いない。

*****: 【コラム 6 : 創造性のもつ力】 *****

私たち筆者が、「創造の瞬間」に着目するのは、次の二つの理由からである。

第一の理由は、創造性とセラピーがお互いに“生命エネルギー”を介して深く重なり合っていることである。すなわち、創造的なことは往々にして治癒的であり、治癒的なことは多くの場合、創造的なプロセスをたどる。これが、ナタリー・ロジャーズ (2000) の提唱する「表現アートセラピー」である。絵を描く、日記を書く、作詩をする、イメージを持つ、瞑想にふける、即興劇に興じるなどの創作活動が、セラピー効果を引き起こす。外的な世界における「創造の瞬間」の実践によって、内的葛藤が解消し、感情が癒される。その結果、さらなる創造性が発揮されていく。遊びと学びに境界がないことがわかる (村瀬、2017)。

第二の理由は、「創造の瞬間」が様々な時間・空間スケールにおいて繰り返し訪れているが、そのことに私たち人類は気づけていない。この「知っているにもかかわらず、そのことに気づかない」状態が、“既知の未知 (known unknown)” である (村瀬、村瀬、2022b; van der Leeuw and Murase, 2021)。

『チベット密教の真理』を著したラマ・アナガリカ・ゴヴィンダ (1991) は、「無限に抽象思考を重ねても、古い教義を探し回っても、仏教の本質は見つからない」と豪語する。なぜなら、不断の自己訓練・自己集中・内的洞察によってこそ、仏教の本質が自得されるからである。つまり、そのような自己鍛錬の時間・空間における発展の無限性こそが、仏教の本質として‘こころ’によって自覚される。この観点こそ、「仏教に限らず、あらゆる科学・技術・芸術の本質」と説く。

私たちはどうすれば創造的になれるのだろうかと自問することが多い。しかし、その答えは次のパラドックスにある。「創造的になろうとするのではなく、すでに身につけている言語能力に視覚的技能を加えること (両者の統合) によって達成できるのだ」と (エドワーズ、1988、230 頁)。確かに、創造的思考における視覚的イメージの効果は、物理学者のアインシュタインや数学者のアダマールも認めている (エドワーズ、1988、238 頁)。創造性が創造性から生まれるという「クリエイティブ・コネクション」の本質は、私たちを取り巻くパラドックスを利用することによって、新次元が拓かれるということではないだろうか。

⁶ 本稿第 8 節で述べるように、松木邦裕氏によると「面談室の壁に掛けられていた絵画にクライアントが気づく場面がある」。絵画という創造された作品が、クライアントのこころを捉えた瞬間とも言える。それが、きっかけとなって「創造性のもつ力」が発揮されるならば、「創造性は創造性から生じる」と言えるのかも知れない。

8. ケプラーによる惑星の運動法則の発見——「理解すること」の理解に向けて

2021年6月から8月にかけて、私たち筆者は松木邦裕氏と森合音氏とともにオンラインでの意見交換を3回実施した。その際に、松木氏はクライアントとの面談をオンラインで行うと、期待される成果が上がらないことを指摘した（もちろん、私たちのオンライン意見交換の機会も例外ではない・・・）。その理由として、実際の面談では「クライアントが、それまでも面談室の壁に掛けられていた絵画に、あるとき突然気づく場面がある」⁷と言う。クライアントに少しゆとりが出てきたかすかな兆候かもしれない。つまり、「言語化されない感覚や行動の変容は、対面でこそ察知される」のである。なぜなら、「主体や客体ばかりではなく、それらを取り巻く環境や背景に変化を促す潜在性が秘められているからである」と⁸。

教育学者の板倉聖宣（1975, 1977）によれば、単なる問題解決ではなく、自分がまだ知らないことを正しく予言できるようになることが、「あることを知った」ということを意味するという。系統的に原理・原則をつかまえていなければ、何もわかったことにはならないからである。ところが、原理・原則を自然現象からどのようにしてつかみ取ることができるか、それが新たな課題となる。

そこで、惑星の運動法則を発見したケプラー（1571-1630）の言葉が参考になる⁹。

知るということは、外的に知覚されたものと、内的な観念とを比較するということであり、両者が一致するか否かを判断することである。・・・外の世界のなかに姿を現わす知覚可能な事物によって、われわれはかつて知ったことを思い出すのと同様に、感覚的経験は、それが意識されたとき、すでに以前から内的に存在していた知的概念を呼び覚ます・・・。魂のなかに潜在的可能性のヴェイルを被って隠されていたものが、そのとき精神の中に実体として輝き渡る・・・。それでは、どのようにしてそれらの概念は過去の精神の中に侵入したのであろうか。私の答えはこうである。あらゆる観念・・・の形式的概念は、・・・理性的な知覚能力を備えた存在の中に内在しているのであって、推理による論証を通じて内部に取り込まれるものでは決してないのである。（ケプラーのことば）

パウリ「元型的観念がケプラーの科学理論に与えた影響」

『自然現象と心の構造』C.G.ユング、W.パウリ、163-164 頁、1976

⁷ ここに“未知の未知（unknown unknown）”——すなわち、「知らないことを知らない」ということ——を物語っている具体例がある。

⁸ 「主体や客体ばかりではなく、それらを取り巻く環境や背景」こそが、精神科医療における治療的環境である。治療的環境には、病院施設や病棟備品などの物理的な環境のみならず、入院生活上のルールや医療スタッフ、同時期に療養中の患者などの人的環境も含まれる。こころを病む人は、治療的環境において安心できる居場所をみつけ、他者との関わり方や地域社会で生きるルールを学び直す過程でこころを癒していくのである（村瀬、村瀬, 2021, 7 頁）。

⁹ ケプラーの言葉に対して、その次に展開するユング心理学に基づく論考は、拙著『未来共創の哲学——大統一生命理論に挑む』（2020, 107 頁）からの引用による。

ケプラーの言う“形式的概念”は、私たち人類による“イメージ形式”が世代を超えて遺伝を介してあらかじめ備わっているということである。動物に見られる“本能”と同じように、「遺伝する心的構造」がある。ここで言う「遺伝」とは、一般に世代を超えて伝達するという広義の概念として用いている。このようなイメージ形式には内容がない。私たちが具体的な経験に出会うことによって、はじめてイメージとして意識されるのである。そのため、どのような内容がイメージ形式から出来上がるかは、その時々時代の精神に左右されるばかりでなく、どのような素材に慣れ親しむかということにも依拠している。このような理由から、私たちは、はじめのうちはイメージがあることすら気づかないのである（第3部 実践論の冒頭部分、参照；本書、頼住氏の論考も参照）。

すでに繰り返し指摘してきた「自己・非自己循環過程」——すなわち、「生得的な“イメージ形式”と外的現実世界である惑星の運動との果てしない共創的循環過程（内と外の間に関わる循環過程）に基づいて、「学び方を学ぶ」普遍原理を再発見し、更新し続けること」——が、ケプラーをして「惑星の運動法則を発見」へと導いたのである。すでに述べたように、その本質は、幼児の言語習得、歩行運動の学習などと基本的には変わらない。

ユングは、「人は何かを感じながらも数年を過ごし、明確に把握するのはある時がきたときのみ」と述べている。これは、問いも答えも、すでに自然の中に埋もれており、一方が問いであり、他方が答えとして与えられていることに気づくには、「時間」の経過が必要だということである。生命の進化に絶対的な時間を要したように、理解が深まる——すなわち、概念が統合されていくという意味での「進化」が起こる——ためには、絶対的な時間が必要なのである。この認識発展過程の本質は、主体としての「内」と客体としての「外」の適応過程である。ケプラーの言葉から明らかなように、この「内」と「外」の適応過程は自然科学の課題であるばかりでなく、動物行動学や心理学、さらには宗教の課題でもある¹⁰。

*****【コラム7:川喜田二郎の発想法(KJ法)】*****

『発想法』を執筆した川喜田二郎(1967)は、フィールドワーク(野外調査)において、観察対象が何を物語っているのかを理解するために、特定の観点ごとにカード(紙きれ)を用意して、そこに観察対象とした現象を書き込んでいった。その上で、出来上がった様々なカードを、次なる「観察対象」として、それらのある程度のまとまりごとに再分類する。それぞれの分類項目ごとに、新たなカードを用意する。そこに分類の意味づけを書き込む。その作業を繰り返すことで、階層的なカードの束が出来上がる。このようにカードを用いることによって知識の外在化が図られる。こうして、発想法(KJ法)に関わる二つの重要な特徴が明らかになった。

¹⁰ 「内」と「外」の適応過程の根底には、普遍的な生命原理——すなわち、「自己・非自己循環原理」——が隠されている。次節で展開するブッシュマンの事例が暗示するように、「内」と「外」の適応過程を介して“こころ”が創発したと捉えることができる。

一つ目は、川喜田が「同質のまとめ」と呼ぶ“要約分析”である。論理学の帰納（特殊事例から一般法則を推論）と演繹（一般法則から特殊事例を推論）を駆使することに対応する。確かに、一般法則は誰かがすでに知っている。しかし、その法則を理解すれば、当人がまだ知らない特殊な事例を正しく予言できることになる。ただし、この操作では情報は増えることはない。なぜなら、個別の事例に一般法則の本質が含まれているからである。

二つ目は、川喜田が「異質のまとめ」と呼ぶ“異質データの統合”である。論理学のアブダクション、心理学の転移・逆転移に相当する概念である。問題を新たな方法で見る、予想外のところに答えを見出す、あるいは「すでにわかっていること」だが、わかっているとは知らないことを明らかにする（エドワーズ, 1988）。この操作では、異質なデータが統合されることによって、情報が新たに創られる¹¹。

川喜田によって考案された発想法（KJ 法）の特徴は、複雑な現象を多様な方法で捉える点にある。それによって、新たな構造が浮き彫りとなり、複雑な現象を理解する際に役立つモデルが創られる¹²。

¹¹ 注意すべき点は、「同質のまとめ」と「異質のまとめ」を相補的に駆使しながらも、どちらによっても捉えられない事項をそれ自体としてカード化することと川喜田は指摘する。

¹² 川喜田二郎の発想法（KJ 法）と NECTE 理論（前編）の相同性については、『未来創成学の展望』の【コラム 8】で論考している（村瀬、村瀬、2020a）。さらに興味深いことに、第 6 節で述べた 2000 年以上の歴史をもつ「発見科学」の施行過程との相同性を確認することもできるのである。

9. ブッシュマンの事例¹³

ブッシュマンの生活から取材された悲惨な実話を紹介しよう。

あるブッシュマンに幼い息子がおり、未開人の特徴であるが彼はその息子を猫かわいがりしていた。・・・ある日このブッシュマンは魚釣りから怒って帰ってきた、一匹も釣れなかったからである。いつものように息子は喜んで跳びはねて彼を迎えた。しかし父親は息子をつかむなり首をひねって殺してしまった。もちろん彼は後になって、息子を殺したときと同じように取り乱して、息子の死を嘆いた。

ユング『タイプ論』（1987、258 頁）

このブッシュマンの実話は、遠く離れた原住民族の世界で起こった「外面的な現実」であるばかりでない。私たち自身のこころの深層に秘められた「内面的な現実」とも言える。同時に、現代社会で日常的に繰り返されている悲劇と根本的に相違ないとさえ思われる。その意味では、現代の精神疾患は、文明化以前の時代にすでにその起源が存在していたのではないだろうか。このような「極端な状態」はある種の拡大鏡の役割として、私たちの日常の心理を解明しうる‘理想モデル’として活用できるのではないだろうか。かつて、がんという病気を生命の‘理想モデル’と捉えてみた。その結果、生命の本質を捉えることができた（村瀬、2000）。同様に、典型的な心理現象を‘理想モデル’と捉えることで、解明困難な心理現象の意味づけが可能となれば、その心理現象を理解できるに違いない。

そこで、ブッシュマンの悲劇を引き起こす心理的な原因を探ってみたい。ユングによれば、このブッシュマンの愛情は、典型的な「自己愛」——すなわち、客体の中の自分への愛——である。このケースの場合は、「客体がそのときどきの主体の激情と同一化する」ことを如実に示している。つまり、「主体と客体が同一化する」ことによって、すでに存在していた「内」と「外」の対立を基盤とした階層が消失してしまう。その結果、こころの発達が止まり、「現実」の認識が出来なくなったのである。

ブッシュマンの事例のような「主体と客体の同一化」は、原住民の特徴として実際によく起こるのだろうか？ユングによれば、原住民の思考や意志などの心的機能は未分化である。そのために意識的な考え方ができない。なぜなら、原住民は前意識的である——すなわち、自分で考えるのではなく、無意識の中で考えがなされている——からである。しかも、原住民の無意識は、野生動物の本能に近いために、新しいものへの恐怖と伝統へのこだわりを見せる。原住民の正常な心的態度では、客体は、そのありのままの存在形式によって働きかけ、主体は客体との接触によって呼び起こされた感覚的知覚を基準にしている¹⁴。現代人から見ると、こうした原住民の自然認識のあり方は、原始的な型を取っているように思える。それは現代人が意識的な認識のあり方に慣れ親しんでいるからである。ユングによれば、原住民が自然を認識する際は、無意識的なこころの出来事を「外」の出来事として捉える「投影」（転移）を基にしている。

¹³ 拙著『未来共創の哲学——大統一生命理論に挑む』（2020、113－116 頁）からの引用による。

¹⁴ この場合、短絡的なかたちで「主体と客体が同一化」しているわけではない。逆の言い方をすれば、主体と客体の差異があるということに、無意識（本能）を基盤とする「こころの起源」の萌芽を認めることができる。

「投影」とは、主体に意識されない「内容」が無意識的に客体の上に移され、その「内容」が客体に属していると思う現象である。実は、この「投影」という現象は、現代人においても、原始的な型のなごりとしてしばしば現れる。こうした「投影」は、その「内容」が主体に属するものとして「意識化」されるとたちまち消失する。そのために、「投影」は、いつもあらかじめなされており、後になってはじめて認識されることになる（ユング, 27-76 頁, 1999）。

例えば、太陽が昇り、そして沈むのは、ここに住んでいるはずの英雄の運命を示しているに違いないと言う。こうして、無意識の内容は、自然現象に映し出される「投影」を通して意識される内容となり、その時にはじめて認識されるのである。ところが、激情に陥っているブッシュマンが我にかえる際にも、また、「投影」を通さざるを得ない。ここに、悲劇が「現実」の型を取る原因があると言える。

ところで、この「投影」（転移）の積極的な意味を確認しておきたい（前編、脚注 11）。第 8 節で、惑星の運動法則を発見したケプラーの創造体験を思い出して欲しい。もともと、世代を超えて伝達するイメージ形式には内容がない。しかし、当事者が具体的な経験に出会うことによって、はじめてイメージとして意識されるのである。私たちが創造性を発揮しているメカニズムは、破壊性も創り出していたのである。

ここで、論考を先に進める前に、一つの心理現象から別の心理現象が予見可能であることを示しておきたい。「主体と客体の同一化」が一つの危険を伴うことを述べた。それならば、「主体と無意識の同一化」も危険を伴うに違いない。これが、ユング（27-76 頁, 1999）が「原危険」と名付けた「自分自身の世界に巻き込む」ことなのである。この「原危険」というのは、自分が誰であるかということさえ忘れる程で、「無意識そのものになった」原住民は無軌道な感情に流される。いずれの場合においても、対立の中庸を行かずにどちらかに一面化することは危険であることがわかる。

こうした一面化を回避する手段として機能していたのが「儀式」なのである。ここに、「宗教の起源」があるのかもしれない。実は、この「儀式」には、別の機能面もあった（ユング, 171-209 頁, 1999）。原住民は意識的に意志を働かせることができず、あらかじめ「意欲的な気分」にならなければ、あるいは「意欲的な気分」にしてもらわなければ、意志を働かせることができない。そのために、「儀式」が原住民を「意欲的な気分」にするために機能していたのである。すると、「儀式」の定着が「こころの進化」を必然的に促し、その結果、こころと儀式の共進化がはじまる。ドウアンヌ（2021, 10 頁）は、「学校という制度の発明は、私たちの脳の能力をとてつもなく増した」と指摘する。学校制度も、人類が創造した“儀式”の一つと言えよう。ただし、社会科学者のオットー・シャーマー（2010, 33 頁）が指摘しているように、「未来を予感し創造する力を育む教育はなされていない」という現代教育の課題を忘れてはならない。

以上の論考から、認識論と実践論が重ね合わされていることが理解できる。そこで、次に第 3 部として実践論を展開したい。現代教育の課題解決の鍵こそ、いかにして創造性を発揮するかに絞られる。そのために、一面化した「ものの見方」の呪縛から解放される、新たな“儀式”が必要なのである。

【第3部 実践論】

私たちは【第2部 認識論】において、‘認識’の在り方が少し変わっただけで、これまで誰も見ることがなかった‘現実’の異なる側面が露わになる事例をいくつも取り上げた。

“パラダイム転換”を必要とする新理論の発見（第6、8節）に繋がる‘創造性’ばかりでなく、ブッシュマンの悲惨な事例（第9節）に見られるような‘破壊性’の発露に至り、その両極の狭間を巧みに乗りこなすかのように発揮される漫画の極意としての‘創造性リテラシー’（第7節）について、共創的な自己・非自己循環原理に基づいて論考した。

【第3部】では、思いもよらない状況や望みもしない事態に直面するという‘実践’から、‘認識’の在り方が意図せずに変わることで、混沌とした世界を幸せに生きることができるようになる事例を紹介する（第10、11節）。そして、新たな状況における演劇（第12節）、医療（第13節）、教育現場（第14節）での‘実践’を踏まえた上で、これまで解明不可能・伝承不可能とされてきた「創造の瞬間」——すなわち‘創造の仕掛け’——の「不伝の伝」について、ポストパンデミック時代を生き抜く共創力への萌芽に繋がることを願って、試論を展開したい。

オイゲン・ヘリゲルは『弓と禅』（1981, 25–26頁）の中で、次のように述べている。「神秘的経験にあずからない人は、どれほどものがき回ろうが、結局はその外側にたっているに外ならない。・・・神聖視されている禅の経典が無駄なほどたくさんある・・・しかしこの経典は、・・・経典の中から、自分がそれとは独立に、すでに持っており、またそれであるところのものの確認を読み取ることができる人に対してのみ、生命を与える意味を開示する・・・これに反して経験のない人に対して経典は無言である・・・それどころか経典は彼を必然的に救いのない精神的迷路へと導くのである」。

本稿の冒頭引用Iで、頼住光子氏が説いている「悟りを会得する過程」は、ヘリゲルの主張と呼応する。こうした語りが「真理」であることを、歴史は証明する。湯浅泰雄『身体の宇宙性——東洋と西洋』（岩波書店、2012）によると、中国では7世紀の唐の時代に、北宗禅と南宗禅に分かれた。

北宗禅では、修行と悟りを分け、自分が向かうべき目標として「悟り」を捉えていた。この場合、「悟り」は主体の向こうにある客観的な状態とされた。「悟り」にこそ意味があり、必ずしも「悟り」に至ることのない修行には意味がないと考えられていた。その結果、北宗禅は廃れてしまった。一方、南宗禅では、修行と悟りを一体化して捉えていた。修行それ自体に重要な意味を認めていたのである。その結果、修行という実践の場において、徹底した主体的思考態度に導くことが強調されたのである。こうして、主体自身の在り方として「悟り」を説いた南宗禅が栄えたのである。

南宗禅の観点によれば、私たちの日々の営みこそ、あらゆる叡智の宝庫と言える。

10. 仏道修行と日々の営み

ヴィゴツキー (2001) は、子どもの発達過程を探究し「言葉の意味は一定不変ではなく、発達する」こと、すなわち「言葉と思想との関係は何よりも物ではなく過程である」ことを見出した。さらに、言語的思考という複雑な統一体を「単位」に分ける分析法を提案した。ただし、「単位」のなかに、説明されるべき全体の特性をもつことを必要条件として、単語と意味との関係として「単位」を見出したのである。その結果、次のことが明らかになった。言葉と思想がはじめてから一つの定型に従って在るのではなく、調和ではなくむしろ矛盾（パラドックス）が存在していて、この矛盾（パラドックス）こそが、思想から言葉への働きを実現しはじめる必要条件であることを突き止めたのである。

この観点は、それまでの「治す・治る病い」という近代医学のパラダイムから、「不治の病い」にあって、こころやからだを含めた全存在として生きることの苦闘・苦悩している人に必要な「病いは経験である」という矛盾（パラドックス）——すなわち、クラインマン (2015) が強調する新たなパラダイムへの転換——とも呼応している。そのパラダイムこそ、「人間という存在がこの世に生きて在ることの生々しい体験を基盤にする」ことである。実は、松木邦裕氏が本書で論考しているネガティブ・ケイパビリティ（負の力）——すなわち、答えのない世界に耐え幸せに生きる力——こそ、ますます混沌の度を増し続ける現代を生き抜くパラダイムと言える。その際に重要な点は、「‘当事者’が主体的に自身の課題や病いに取り組むかどうか」にある。

ただし、ここで言う‘当事者’とは患者のことであるばかりでなく、医療者のことでもある。石井均（クラインマン, 2015, 55 頁）が指摘するように、患者は病気を持ち続ける力を失い簡単に答えを医療者に求めようとし、医療者は患者の苦しみに付き合うのではなく簡単に答えを与えようとしているからである。石井は「悩みを持ち続ける力、苦しみを持ち続ける力はどこからくるのか？」と自問し、おそらくは「人と人との関係、将来に対する希望、時間を頼りにすることからくるのではないか」と自答する（【コラム 5】で述べた‘時間・空間・こころの広がりと深まり’参照）。その上で、石井は「この目に見えないものを頼りにできる力は、どのように人に与えられるのか？」と問いかけている。

ここで、私たち筆者は石井の自問自答をヒントにしながら、はじめに指摘した‘‘当事者’が主体的に自身の課題や病いに取り組むかどうか’ という重要な観点に立ち戻りたい。全ての観点において、‘‘当事者’が主体的に自身の‘課題’に取り組めるように環境を整える’ことが必要ではないだろうか。すでに述べたように、2021 年 12 月 26 日、筆者は古書店で偶然『表現アートセラピー：創造性に関われるプロセス』（ナタリー・ロジャーズ著、2000 年）を見つけた。その中で、ロジャーズは次のように語っている（3 頁）。

「心理療法の一つの要素は、創造的な生命エネルギーの目覚めです。すなわち、創造性とセラピーは重なり合っているのです。創造的なことは往々にして治癒的で、治癒的なことは多くの場合、創造的なプロセスをたどります。・・・‘表現アートセラピー’または‘表現療

法」という用語は、普通ダンスセラピー、アートセラピー、そしてミュージックセラピーをさします。日記を書くこと、詩作、イメージ、瞑想、そして即興劇を用いるセラピーも含まれます。感情の癒しを促し、内的葛藤を解決し、個人の創造性を目覚めさせるために表現アートを用いる領域は、今ますます発展しています。」

筆者は続く文章に思わず引き込まれた。「読者が表現アートを・・・生かし、自分を知る能力を高め、より深い人間関係を築いてアーティストやセラピスト・・・として、より豊かな方法を用いるうえで一助となることを願ってやみません」と。なぜなら、このロジャーズの文章と石井均が指摘する「人と人との関係、将来に対する希望、時間を頼りにすること」とに、相同性があると気づいたからである。ここに「ケア共創」の本質が隠されている。

***** 【コラム 8：自分が大地になる】 *****

人類学者である岩田慶治は、小学生の頃から大地の学問である地理学を好んだと言う。その理由は、大地を踏み、大地を歩みながら、足元の大地の声を聞いたかったからだと述べている。人類のゆくえは地表のかたちのなかに封じ込められていると捉え、その大地の陰翳、あるいは大地に刻みつけられた山水の綾、凹凸、そして、その意味を読み取り解釈しようとしたのである。実は、岩田にその方法を教え、方向性を指し示してくれたのが道元の『正法眼蔵』であった。そのために、岩田は、『正法眼蔵』95巻を常に身近において、道元との対話を続けたのである（『道元との対話 一人類学の立場から』, 講談社学術文庫, 2001, p.350-352）。

地理学の根本問題は、「地域」とは何かを考えることであると言う。「地域」の本質を、観察者、研究者の側からでなく土地の側から考える、自分が土地になって、その土地の中の「地域」としての創造的な表現を解読するにはどうしたらよいかという問題に頭を悩ましていた時、岩田は次のような不思議な体験をした。

このできるはずのないと考えられた問題を一夏の間、考え続けて思いつめたあまり眠れずにいたために、午前 2 時頃に立ち上がり便所に行った。闇の中でいつものように電気のスイッチを探すが、どうしてもみつからない。その時、突然に、いや、徐々に全身が闇に融けこんでいった。これで死ぬのかと思い、スイッチを探す右腕を伸ばしたまま、闇の中に自分自身を喪失してしまったと言う。しばらくして闇の中で「いるか」と問うものがあり、「いる」と答えるものがある。そういう問答を数回繰り返しているうちに意識が回復し、身体感覚が戻るのがわかったと言う。この体験を得て、自分がこうして大地に座っていることと、自分が大地になって大地の側からこの世界を見つめていることが、実は、同じことなのだということがよくわかったと言う（前掲書, p.56-57）。

人類学においては、観察者、研究者の側、すなわち、「地域」の外側から **etic**（文化外）の立場で対象化して眺めるだけでは、「地域」の意味は理解できない。そのために、土地の側から、すなわち「地域」の内側から **emic**（文化内）の立場で味わうことが求められる。

「地域」の外と内を行き来しなければ、「地域」の声に迫ることができないからである。しかし、岩田の体験は、さらに **emic** の立場を超えて自分自身が土地になったのである。そして、その土地の中の「地域」としての創造的な表現を解説しようとする。その時に、自分が大地に座っていることと、自分が大地になって大地の側からこの世界を見つめていることが、実は、同じことなのだという道元の教えに気づくのである。

学問における難問と『正法眼蔵』の中の難問は、実は同じ問題なのであり、岩田の述べているように「どうしたら自分の身心を大地（生物・自然）の側に投げ入れて、大地（生物・自然）のなかから地表（生物・自然）の現象を眺めることができるかということに尽きるのではないだろうか。その際に、重要となる観点は、‘こちら’にある存在が‘あちら’に往くという一方向的運動ではなく、再びこちらに還ってくる往還運動にある（前編、脚注 3）。しかも、岩田が指摘するのは、その運動は同一平面の行き来ではなく、奥野（2022、204 頁）の言葉を借りれば“メビウスの帯”のように‘こちら’と‘あちら’がひとつながりとなる構造である。

11. ネガティブ・ケイパビリティ（負の力）の実践

ヴィゴツキー（2001）の「言葉の意味は一定不変ではなく発達する」という表現を「物質や環境の影響は一定不変ではなく発達する」と置き換えられないだろうか¹⁵。そのことを、診療行為を通して自覚し、自らの心身を道具として実践した医師がいた。

梁瀬義亮（1998）は農薬の急性毒性ばかりに関心が向けられていた時代に、慢性毒性作用を発見した。梁瀬は自分自身による人体実験を行い、その作用の存在を証明したのである。このように少数の事例であっても、その経過を十分に長い時間にわたって観察する方法論によって、環境因子の健康影響に関する輝かしい成果が得られてきた。

梁瀬義亮（やなせぎりょう、1920－1993）は浄土真宗の寺院で生まれた。熱心な仏教徒であるため仏縁は深い。京都大学医学部を卒業後に軍医として、第一線部隊に配属されてフィリピン戦線に従軍した。激烈な戦闘による全滅全滅の中で、奇跡的に九死に一生を得て復員した後に、郷里の奈良県五條市に戻って開業した。開業医として診察に追われる日々の中で、当時使用されていた農薬が人体に恐ろしい影響を及ぼしていることに気づき、いち早く農薬汚染の実態を世に訴えた。ところが、当時は農薬汚染の危険が人々によく知られていなかった。そのため、梁瀬の訴えが直ちに認められることにはならず、苦闘の日々が続いた。最終的には、自身による農薬接種という無謀な人体実験を行って、農薬汚染の健康への影響を証明したのである（梁瀬、1998）。

1990年9月16日、NHK教育テレビ「こころの時代」が放映された。番組の中で、梁瀬は次のように述回している¹⁶。

大変苦勞の多い不幸な人生だったんですが、ある意味では非常に自分ではできない仏道修行をさせて頂いた。・・・まことに幸せな一生だった。・・・今から思えば、私、こういうことだ、と思うんです。人間には非常にエゴがある・・・エゴというのは非常に傲慢な心です。俺は生きるのが当たり前だ。周りの世界がある、これは当たり前だ。

・・・そして一生終わってしまう。これ普通ですね、普通の心ですね。ところがその心とともに、理屈から言えば、事実として、私は生まれたのです。生まれた後、親に生かされたんですね。実際問題として、私の生きるということは、大勢の人のお陰で生きていますよね。食べる物、着る物、すべてね。それから大自然によって生かされていますね。

・・・初めて実際あることに気がつきますよ。・・・あらゆる生命というものを認めて、世の中を見てみると、・・・一つの地球はハーモニーでなければいけないんだ。

梁瀬義亮は、ヴィゴツキー（2001）の「言葉の意味は一定不変ではなく発達する」という主題を「物質や環境の影響は一定不変ではなく発達する」として自ら体験したのである。

科学に対して正しい認識をもち、法然上人の「ただ念仏せ」、道元禅師の「ただ仏陀を仰いで心を静めなさい」、親鸞聖人の「信ずるほかに別の子細（しさい）なきなり」、あるいは日蓮聖人の仏祖の仰ぎ方を事実として体験することで、「仏法は単なる理論、単なる哲学じゃなくって、事実だ」ということを参考にさせていただきたいと、梁瀬は結んでいる。

¹⁵ イギリスの哲学者のオズワルド・ウォーコップは、『ものの考え方—合理性への逸脱』の中で、次のように述べた。「物質は出来事である」と。

¹⁶ 梁瀬義亮「いのちの発見」、聞き手：白鳥元雄；<http://h-kishi.sakura.ne.jp/kokoro-83.htm>

12. スタニスラフスキー・システム ——俳優で演出家が生み出した実践システム——

われわれの芸術はなによりもまず内面的で精神的で、意識下のものである。この領域には、奇跡を行う魔法使い、すなわち俳優の自然だけが入り込むことができる。意識はそれを手助けするだけである。創造がおのずと直感とインスピレーションによってなされるときが一番いいのだ。しかし、そうならなかった場合はどうすればいいのだろうか？その時は、内面的・外面的な意識的な諸手段を使って無意識的な創造を呼び起こす他に方法はない。意識的なものを通して、無意識的なものへ。これこそ、いわゆる「スタニスラフスキー・システム」といわれるもののスローガンである。

コンスタンチン・スタニスラフスキー
『俳優の仕事 第一部—俳優教育システム』未来社, 2008, 519 頁

図 21 がスタニスラフスキー・システムである。この図式を見れば見るほど、ますます私たちは混乱してしまう。なぜなら、魅力的・無意識的な創造の高みを目指すには、いきなり無意識を相手にするのではなく、その高みへと導いてくれる物質的・意識的な技術を相手にしなければならないからである。俳優としての人間が向き合わなければならないのは、目には見えない創造的な無意識を常に考慮しながらも、目に見え・知覚される身体技術の意識的な方法を探求・実践することに尽きる。すなわち、創造的な身体を創り出すには、味気ない無味乾燥な単純作業こそが必要である。ここで、頼住光子氏の冒頭引用 I と妙に重なる点が、スタニスラフスキー（2008, 519 頁）の次の言葉である。「(その単純作業が) 楽しい物に思えるのは、それが、はじめから、自然そのものの無意識的な、しばしばインスピレーションに満ちた創造という、魅力的で最終的な目標に裏打ちされるときである。」

このシステムの形式についての数多くの論考について、スタニスラフスキーは極めて冷ややかに捉えている。というのも、その外面化されたシステム自体が大切なのではなく、それが内面から呼び起こされることが忘れられているからである。すなわち、人間に奇跡を起こすことができるのは外面的なシステムではなく、「心と体の自然」という人間の内面に息づく素晴らしい女神だけなのである^{17 18}。

¹⁷ 近代スポーツ界では、日本人の体格や体力は欧米人よりも劣っていると思われがちであった。ところが、競泳日本代表ヘッドコーチの平井伯昌（2012）は、日本人にふさわしい練習方法を創造することで、その疑念を払拭した。実は、日本人に欧米人流の練習を要求することが問題だったのである。平井によると、技術を極めて記録を伸ばしても、世界で通用する選手になれないと言う。なぜなら、「心・技・体」というように、技術や体力だけでなく心や人間性といった内面まで鍛えなければ世界の大舞台で最高の競技を実践できないからである。記録のスゴイ選手が一流で、世界で勝つという大きな目標を達成するのが超一流である。一流と超一流の差は“心”だと平井は言う。心と脳、そして身体はつながっているからである。

¹⁸ 『弓と禅』の著者オイゲン・ヘリゲル（1981）の洞察によると、弓道の目的とは、弓と矢を用いて外面的に的を射当てるのではなく、自分自身が内面的に何事かを成し遂げることにあると言う。つまり、弓射は目的ではなく、目的に至る‘道具’に過ぎない。この観点に立つと、いかなる日本伝統芸術・武術、さらには日常の暮らし方次第で、仏教に通じる道を見つけることができる。

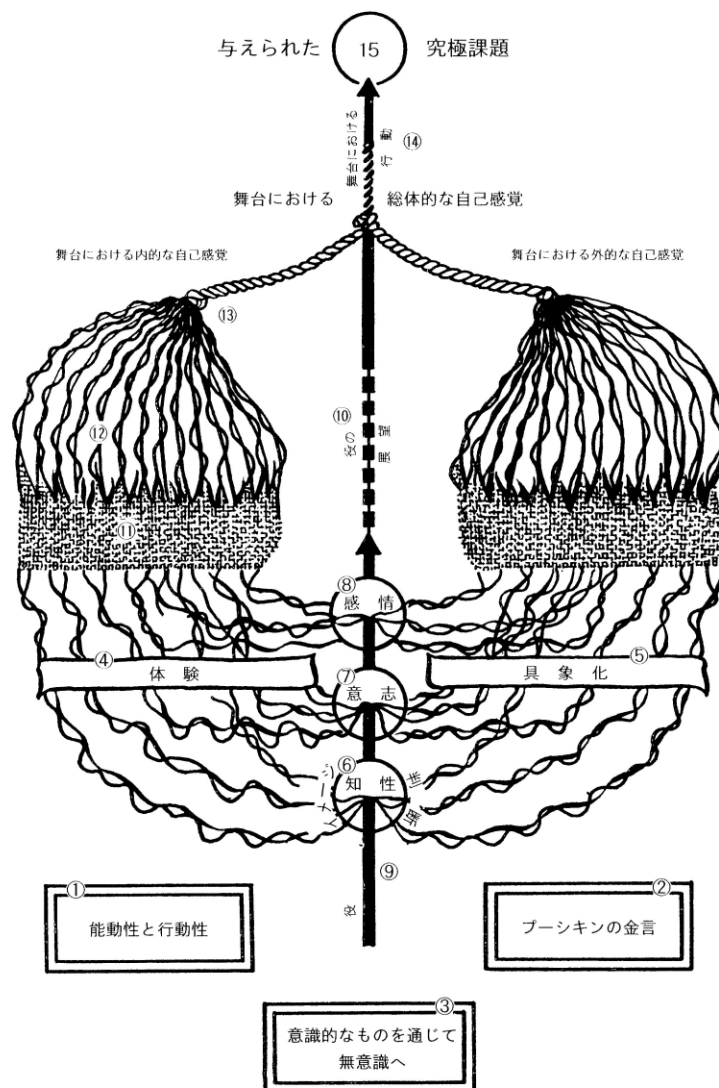


図 21：スタニスラフスキー・システム（『俳優の仕事』第二部 387 頁より）

俳優の心のなかで起こっていることが表されている。まず、大地を支えるような3つの理念がある。①「能動性と行動性」とは、舞台俳優の芸術は内的小および外的行動の芸術と言える。②「プーシキンの金言」とは、プーシキンの次の言葉である。「与えられた状況における情念の真実、真実味のある感情・・・」。③「意識的なものを通じて無意識へ」とは、自然そのものの潜在意識による創造——俳優の意識的な心理操作を通して。3つの主要な理念の上に成立する2つの綱領がある。④「体験」とは、私たちが概略だけを学んだ「体験の過程」。⑤「具象化」とは、「具象化の過程」。まるで2台のオルガンの前に座る3名のオルガニストのごとく、2つの綱領の上に腰を据えているのが、精神生活を促す3つの推進力⑥知性（イメージ）、⑦意志（判断）、⑧感情。⑨中心軸の基底として、新たな戯曲と新たな「役」が精神生活を推進するものの中に浸透し、創作意欲を呼び起こす。⑩「役の展望」とは、精神生活を推進するものが創造活動の主要目的が明らかになるにつれて、途切れがちの状態から首尾一貫したものになっていく。⑪心の内的領域および独自の特質、能力、才能、天性の素質、俳優としての熟練、心理操作術の方法を備えた創造活動のための器官。これらの要素はすべての領域に生きており、精神生活を推進するもの（⑥知性、⑦意志、⑧感情）がそこに根付いた役の心の一部とともに心の領域に入り込む。⑫精神生活を推進するものが目指す流れ。この流れが心の領域を通る前⑩と後⑪を見比べると、⑥知性、⑦意志、⑧感情が識別出来なくなっている。⑬「舞台における内的な自己感覚」とは、⑥知性、⑦意志、⑧感情の合流点における精神状態である。⑭「舞台における行動」とは、⑥知性、⑦意志、⑧感情がさらに結び合わされる。⑮それが「与えられた究極課題」に向かって流れている。図版の右側は、外的な具象化の過程を表している。

スタニスラフスキー・システムについて、図 21 を眺め、その説明を読んでも完全に理解することは筆者にとっては難しい。ここで、ヴィゴツキー（2001, 425－428 頁）の解釈が役立つ。ヴィゴツキーによれば、思想は二つの異なる方法を介して媒介されるという。一つは、外面的記号（言葉）であり、他の一つは内面的な意味である。問題の核心は、思想が言葉で表現されるのではない。思想が形になるのは、言葉で行われるときである。その際には、意識を用いて直接的に働きかけることは、物理的にも心理的にも不可能という。間接的に何かを媒介とするほかに道はない。はじめは、意味によって、後には「なぜ」に答えられる動機づけに関係した情動的・意志的傾向を明らかにしなければならない。そのときのみ、他人の思想が理解される。

ただし、思想から言葉への道は、数え切れないほどの多種多様な順・逆方向への移動が可能であり、どの切り口にも両方向の運動がある。思想は個々の単語から構成されているのではなく、つねにある全体をなし、その延長・容量において、個々の単語よりもはるかに大きい。「思想を欠いた言葉は、なによりも死んだ言葉である。言葉に表現できない思想は影のようなもの」である。この思想の問題こそ、心理学者より先に舞台の芸術家がつきあっていた、とヴィゴツキー（2001, 432 頁）は指摘する。さらに、ヴィゴツキーは、スタニスラフスキーが書いた演劇の台詞に平行して、主人公の願望・動機が書き付けられていることに注目する。スタニスラフスキー・システムを彷彿されるからである。

この論考を手がかりにすると、図 21 は図 17（前編）と同じように捉えられることに気づく。図 21 の垂直軸を下から上に貫く時間の流れは、循環過程（全体）として捉えることが可能であり、また、左右対称的な体験と具象化の過程は、内的経験と外的表現の循環過程（全体）として捉えることが可能と思われる。はじまりが既定できない、逆に言えば、すでに「はじまり」に「終わり」が含まれている。その状況ゆえに、簡単に「思想が言葉にならない」のではないだろうか。

***** 【コラム 9：究極課題の探究】 *****

単純な無意識的な感情や体験は、意識的に表現しようとするとは極めて複雑になってしまふ。スタニスラフスキーは、役者が作家の作品を演じる際の注意点として、作品の「究極課題」を見つけることと強調する。例えば、トルストイは生涯にわたって自己完成を追求し、ドストエフスキーは生涯にわたって人間の心に神と悪魔を探究し続けた（スタニスラフスキー, 2008, 455 頁）。それらが、作者が求め続けた「究極課題」である。

それに対して、作品を演ずる際には、作家の構想から離れずに、しかも役者の個性的な感性を失わず、作品の中に自身の人間性を現わすことができる「究極課題」を探さなければならない。役者が自分で発見する必要がある、また、役者の主観的体験を伴うとともに、自身の心で共鳴しなければならない。たとえ、作品の「究極課題」が味気ないものであっても、役者自身が深化させ先鋭化するよう努めるべきと考えた。逆に、すぐれた作品では、「究極課題」とそれに一貫した役者の行動は、作品の本質から自然と出てくる。

もちろん、作家の作品のなかに、「究極課題」を探しだし、自身の心で共鳴することが必要である。しかし、「究極課題」は潜在意識に潜んでいるため、長期におよぶ探究が必要となる。しかも、「究極課題」をどういう言葉で表現するかがポイントとなる。面白いことに、名詞を動詞に変えるだけで、創造性や勢いが増して活力が高まることを実感できる（スタニスラフスキー, 2008, 458 頁）。

スタニスラフスキーは、『ハムレット』を例にして、その変化を見事に表現している。「究極課題」を「父の追悼」とすると、単なる家庭劇と捉えられる。ところが、「存在の神秘を知りたい」と動詞句にした途端、神秘的悲劇に変貌する。その本質は、「生の深淵をのぞき込んだ人間は、存在の意味を解釈しなければ生きることが出来ない」と言える。さらに、「人類を救いたい」と捉えると、「地上から汚れを一掃しようとする強い願望が現れ、悲劇を一層深める」ことになる。

13. 翻訳とは何か ——創造的認識の一形態として——¹⁹

2019年10月26日、京都大学国際シンポジウム『未来創成学の展望』に哲学者の上原麻有子と私たち筆者らは、パネリストとして登壇した²⁰。その場で、上原は興味深い問題を自問自答した。「東洋の哲学を西洋世界に向けて翻訳することは可能だろうか？私の見解では、東西文化の間での翻訳は、極めて困難ではないか。極論を言えば、翻訳は不可能ではないかと思われる」。直後に、宇宙物理学者の佐々木節が、「科学者が自然を探究することは、ある意味では‘翻訳’と言える。確かに、自然を完全に翻訳することは不可能かもしれない。しかし、ある程度、翻訳は可能である。そう信じて研究している」と指摘した。

本節の冒頭に引用したトーマス・クーンの観点を踏まえると、ここで議論されている全ての見解には等しく妥当性があると言える。すなわち、どのような問いを立てるか、どのような方法論を用いるか、どのような時間・空間スケールに着目するかによって、私たちの理解に届くような翻訳が「可能」であったり、「不可能」であったりするのではないだろうか。

(1) こころの病いからの回復を支える‘翻訳’作業

‘翻訳’という作業を心身の相互理解へと拡張できないだろうか。実際に、人は自分自身の心身のシグナルをうまく‘翻訳’できなくなると、様々な病いを発症してしまう。逆に、心身のシグナルがうまく‘翻訳’されはじめるとき、治癒の兆候が認められる。そうであるならば、病いの発症と病いとの共生という異なる状態の間に‘翻訳’作業がなされるとき、私たち人間は病いからの‘回復’を実感できるのではないだろうか。このことについて医療と看護実践の二つの視点から、論考を加えてみたい。

精神科医療において、「回復」(リカバリー)は、「元に戻る‘こと’」ではなく、時間の流れの中で、心身を再統合・再構成しながら、「まったく新しい可能性を拓こうとする‘過程’」を意味する。まったく新しい可能性とは、夢や希望、やりたかった学習、仕事等、どんなことでもよい。まったく新しい可能性を拓こうとする‘過程’そのものに価値を置くのである。仏教哲学では、(病いの)はじまり、(病いの)さなか、(病いとの共存による病の)おわりが、すべて首尾一貫してその統一性に乱れない状況である(ペアレント、2004)。このような全体性の観点に立った医療においては、「この病気になってよかった」という一致した言葉が患者から聞かれることが多い。その理由は、病気にならなければ気づくことがなかった人の優しさや、日常生活の中に潜む輝きに気づくことができたからだと言う。

¹⁹ スタニスラフスキー・システムの問題は、翻訳というより広い観点から論じられるのではないだろうか。異なる文化間での作品の翻訳の問題は、自己が非自己を理解する際の問題とも相同であり、さらには自己が自己を理解する課題とも同型である。その点から、翻訳についてすでに発表した以下の論考を引用することにした。村瀬雅俊・村瀬智子「未来共創の哲学—「自己・非自己循環理論」の提唱から、「大統一生命理論」の構築—」京都大学大学院文学研究科紀要『日本哲学史研究』特集「日本哲学と科学」第18号、2021、62-117頁。

²⁰ 京都大学国際シンポジウム『未来創成学の展望』は、京都大学の主催により京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホールにおいて開催された(実施責任者：村瀬雅俊)。
<http://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~future/news/2019-10-24-26.html>

著者の一人も看護師として、うつ病のために生きる希望を失い、自殺未遂後に助けられたA氏を看護した経験がある。A氏は、看護師である著者に向かって「死にたいと思ったのに死ねなかった。どうしてなんだろう。元に戻れるかな」と質問した。その質問を聞いた著者は、「Aさんには、元に戻ってほしくない」と答えた。A氏は驚いた顔をした。そこで、「もし、元に戻ったら、また、同じことが起こるのではないか」と返してみた。A氏は、しばらく考えこんでいた。その後、「第二の人生を生きようと思う。このことに気づくために病気になったと思うから」と語りかけてきた。そして、その言葉通り退院し、第二の人生を歩んでいる。‘翻訳’作業が無意識・意識の協調によって行われると、新しい‘意味’が創発するのである。

カウンセラーの高橋（1997）も、治癒について、うつ病で十年間も苦しんだクライアントの事例をあげて、次のように説明している。「彼らは、病気をしなければ気づかなかった‘普通’の生活の奥にある価値に気づいたのである。その価値は、自分の心を奥深く探っていくと分からないものであるから、彼らにとっては、病気が必要だったのだ」（208頁）と。高橋は退路を断つために絶望が必要だと言う。絶望が不退転の決意を与えてくれるからである。しかし、この絶望が‘翻訳’されないままに放置されることもある。そうになると、新たな‘意味’や‘価値’が創発されず、逆にその身体表現として、不治の病いや障害が現れてしまう。あるいは、「象徴的死」（ローゼン、2000）と捉えられる自傷行為や自殺企図へと転じてしまう。ところが、ここで「象徴的死」の創造的な意味が‘翻訳’作業によって見いだされると事態は好転する。なぜなら、自分が死にたいという心を‘死なせる’——すなわち、精神的な死を受け入れながらも、生命体としての身体の命は維持する——ことが、人生を再生するための一つの方法となるからである。それは、精神レベルにおける‘neg-emergence（反創発）’という概念として捉えられる²¹。医療者は「反創発」としての「象徴的死」を、患者自身が新たな人生の一步を踏み出すための対処と捉えて、再生に向けて支援する必要がある。

カウンセラーも看護師も、クライアントや患者を支援する目標は、病や障害を取り除くことではない。クライアントや患者自身が、自らの人生を振り返り、これまでの人生から、これからの人生を再構築するために病いや障害が必要であったという境地に辿り着くことである（村瀬、2009）²²。これがレジリエンス（回復力）である。支援者は、この人間のもつレジリエンスを心から信じて、クライアントや患者と共にリカバリー‘過程’に伴走する。リカバリー過程には時間がかかる。その間、答えが出ない状態に耐えなければならない。その耐える力がネガティブ・ケイパビリティ（負の力）である。援助者は、ネガティブ・ケイ

²¹ 「死」を neg-emergence（反創発）という概念で捉える論考は、次の文献で展開されている。Capra, F. and Luisi, P. L. The Systems View of Life: A Unifying Vision, Cambridge: Cambridge University Press, 2014

²² これは、アウシュヴィッツのユダヤ人強制収容所から生還したフランクル（2002）が創成したロゴセラピー（意味論）にも通じる。フランクルは、どのような状況の中でも生きる意味を見出すことができれば、生きられることを自らの体験から学んだ。その意味では、病や障害と共存しながらも、人生に新しい価値を見出す力は、クライアントや患者自身に在ると言える。

パビリティを持って、クライアントや患者と共に在り続ける。ここに、こころの病いからの回復を支える援助の‘技’があり、‘翻訳’を介して‘回復’過程を創発する本質がある。

*****【コラム 10: 未来を創るアートとケアの対話】*****

アーサー・クラインマン (2015, 68 頁) は、慢性疾患を抱えながら生き続ける患者や現実が起こっている状況が絶望的である患者の語りをこころから聴き、患者がその疑問を探究する有りように敬意を払うことは、「ひとりの患う人間として理解し認めるアートなのだ」と捉えている。その意味は、ひとりの患う人間と対話する際に必要なのは、医療者の洞察力——すなわち、アートの力——に他ならないということである。ところが、現代の医療では疾患名による分類化が進むあまり、そのアートの力が醸成されていないという。そのため芸術家・音楽家が「音」や「沈黙」をどのように解釈するのかという課題に触れ、アートの力を体験することで、医療・看護者は自身の感情にこれまで以上に気づくようになり、深い次元で患者との関わりを結べるようになる。

上記のように、文章によって伝えたい内容を表現することは出来る。しかし、文章表現だけからでは、医療・看護者がその内容を自身の課題として引き受けることは難しい。そこで、2021 年 12 月 18 日 (土) に日本赤十字豊田看護大学・京都大学こころの未来研究センター人文社会科学・文理融合的研究プロジェクトの共催のオンライン・シンポジウムを開催した。参加者の反響を次に紹介したい。

心の健康づくりシンポジウムでは貴重な学びを得ることができました。心より感謝申し上げます。非常に感銘を受けました！！

看護の基本を振り返ることができました。人々の心身の痛みを静かに受け止め、癒し、やがてその人なりに回復していく過程には心に響くアートの持つ力が大きいことを痛感しました。

岡野弘幹さんによるアースミュージックの演奏により、洗練された音色が心地よく、癒されました。シンポジウムはその演奏から始まり、森合音さんの実践の話題で感動し、村瀬智子先生の循環論(理論)の話とつながり、今回のシンポジウムの主旨がよく理解できました。

今回のシンポジウムで、音楽と絵画というアートは看護ケアを醸成するために必要なもの・意味深いものと感じました。もっともっと広く多くの医療従事者に知ってほしいと思います。(看護大学教員)



図 22 : ポスター

クラインマン (2015, 50 頁) は、「人間を統合された自己ではなく、引き裂かれた自己として捉える。・・・そこには調和ではなく不調和という状況がある」ことを強調する。この観点にこそ、絶望的な状況の中でも「自分が何者であるか」という問いへの自己表現に自ら

の力で辿りつく鍵がある。ケアとは、治すという次元とは異なる。医療・看護者が患者に「あるがままを受け入れる信念」を伝え、自身の自己表現を支援することに他ならない。

14. 教育現場での実践

音について面白いエピソードがある²³。同じ環境で同じ音を聴いても、人によって音の感じ方が違う。その理由は、人によって感覚の成立や発達の仕方が違うからである。同じ音を聞いても、参照する音が異なれば、音の判断は変わり得る²⁴。集団を構成する個人に多様な個性があるということは、音楽を提供する側にとっては、いかにして感動を与えるかが課題となる。そのために、個性あふれる聴衆を前にして、音楽家たちは作曲段階での期待される音楽構造からの‘逸脱’や演奏段階での芸術的な‘逸脱’を試み続けている。

人間の個性には多様性がある。そのために、感動体験を一律に引き起こすことには困難さが伴う。ところが、その困難さこそ、福音とも言える。なぜなら、人間の個性に多様性があるからこそ、一人の個人が何かの‘体験’をきっかけに突然、変貌を遂げ得るからである。本節では、この点について教育現場での実践例を通して論究したい。

14.1. 西田幾多郎の純粹経験

西田幾多郎の「純粹経験」には、言葉を尽くしても語り尽くせない深遠な神秘がある。そこで、「純粹経験」とは、先人たちが捉えようとしていた創造世界であり、その世界へのアプローチの方法ではなかったという観点について論を展開したい。

芸術教育学者のベティ・エドワーズ（1988）の『内なる画家の眼』は、創造性について書きながら、創造の過程を具現化している。その点で、文字通り‘創造性’を発揮している著作である。エドワーズが指摘した重要な点は、「絵を描く過程が創造の過程と同じである」という気づきである。その上で、言葉だけでは創造性を語るのには不適切であり、言葉によって創造思考までが妨げられることを見いだした。描くためには、これまでとは異なった「ものの見方」が必要であり、その状態を持続することが求められる。これが、創造過程の本質である。

おそらく、視覚的な芸術世界には言葉ではなく、その世界にふさわしい知覚によって接近することが求められる。それが、‘直接的知覚’である。詩人のゲーテは、そのような知覚について、「感覚的想像力」という言葉で表現している。ここに、「純粹経験」を辿るヒントが隠されているのではないだろうか。そこで、「純粹経験」を擬似的に体験できる極めてユニークな方法を紹介したい。

²³ オーディオテクニカ『音、音、音。音聴く人々』（幻冬舎、2012年）

²⁴ サウンドアーティストの岡野弘幹氏は、同じ種の虫でも、発生する音が個体ごとに微妙に異なっていることを指摘する。人によって、同じ音が異なって聞こえ、また、同じ個体が微妙に異なる音を発するところに、自然のハーモニーの不思議さがある。ここに、あわい（間）を楽しむ意義がある。

14.2. 純粋輪郭画のパラドックス

エドワーズ (1988) は、キーモン・ニコライデスの『デッサンの道しるべ』で紹介されている純粋輪郭画に着目した (図 23)。これは、「手のひらのしわ」を細部に至るまで緻密に描く方法である。図 23 のように、画用紙を正面にお気、いくぶん左に振り向く姿勢を取りながら自身の左手のひらを眺める。画用紙に目を落とさずに、左手のしわを注意深く描いていくのである。著者の一人も実践してみた (図 24)。面白味も感動もない単純作業である。ところが、この作業によって、知覚の仕方が変容したのである。エドワーズによれば、この作業によって獲得した「ものの見方」こそが「画家」の「ものの見方」であるという。ただし、そうして獲得した「画家」の「ものの見方」は永続しない。それは、感動体験が永続しないのと同じである。

先に述べた、音楽における「逸脱」は作曲家や演奏家のレベルで実践され、感動はそれを聴く側に生じていた。ここでは、自らが純粋輪郭画を用いて、従来までの「ものの見方」からの「逸脱」を創り出し、自身の創造体験を創り出すことに寄与するのである。



図 23

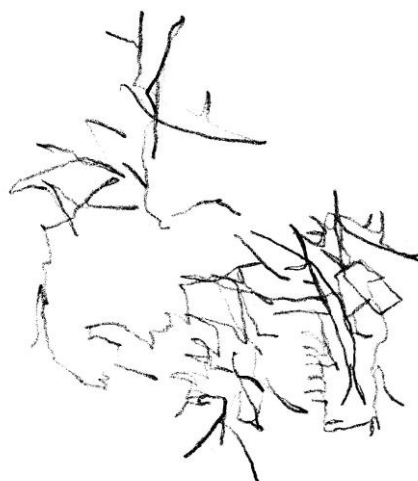


図 24

図 23：純粋輪郭画 (エドワーズ『脳の右側で描け 第3版』エルテ出版, 90 頁より)

図 24：村瀬雅俊 による「純粋輪郭画」(2015 年 10 月 27 日のスケッチ)

この純粋輪郭画の本質は、部分を拡大すると全体と同じようなパターンが続くフラクタルにある。このフラクタルのパターンは、先史時代の洞窟に描かれた奇妙な痕跡にも見られる (エドワーズ, 2002, 94 頁)。この視覚的知覚と論理的言語が一体化したとき、真の意味で創造性が拓かれる。仏教においても、フラクタルの特性をもつ曼荼羅が修行の道具として用いられている。この本質こそ、西田幾多郎の「純粋経験」と言えるのではないだろうか。ここに、「ものの見方」を変革する秘訣が隠れている。

次に示す「逆さまの絵を描く」方法は、異なるアプローチではあるが、同様の「経験」を私たち実践者に呼び起こすのである。

14.3. 「逆さまの絵を描く」方法

エドワーズ（2002, 58-59 頁）は、「逆さまの絵を描く」ことを思いつき、大学の講義で実践することにした。手本は、図 25 の中央に描かれているパブロ・ピカソによるロシアの作曲家イーゴリ・ストラヴィンスキーの肖像画である。著者の一人も、さっそく実践してみることにした²⁵。図 26 は、ストラヴィンスキーの肖像画を逆さまにして、それを描く社会人大学院生が、時間経過を気にすることなく、模写に熱中しているところである。

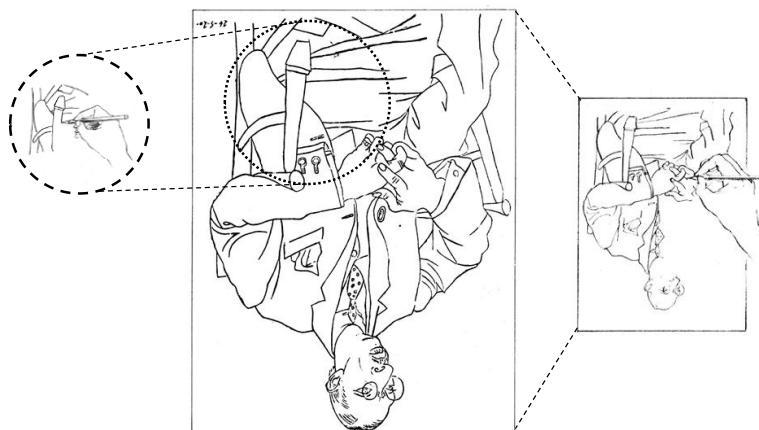


図 25 : パブロ・ピカソによるロシアの作曲家イーゴリ・ストラヴィンスキーの肖像画
（エドワーズ『脳の右側で描け 第3版』エルテ出版より）



図 26 : 京都大学エグゼクティブ・リーダーシップ・プログラムにおいて、「逆さまの絵を描く」方法に、時間を忘れて取り組む 2 名の社会人大学院生

日本赤十字豊田看護大学でも、「逆さまの絵を描く」方法を実践してみた。女子学生の一人は、次のように感想を書いている。「この絵を普通に描いたら、こんなに上手に書けていなかったと思います。みんなもそうですが、集中力がとにかくすごくて、時間がたつのが速かったです。顔を顔としてかかず、見方を少し変えることでここまで変化することに驚きました」と。

²⁵ 京都大学エグゼクティブ・リーダーシップ・プログラム <https://www.clp.kyoto-u.ac.jp/professor/murase/>



図 27：手本（左）と筆者による模写（右） 図 28：手本（左）と筆者による模写（右）

図 27 と 28 は、それぞれ手本（左）と筆者による模写（右）である。筆者自身も、時間が経つのを忘れて模写に集中したことをはっきりと覚えている（右下にサインと日付が記されている 2015 年 10 月 27 日）。

この方法は、教育においても活用できるに違いない。なぜなら「純粹輪郭画」や「逆さまの絵を描く」方法を実践することによって、いつもとは異なった思考モードが体験されるからである。しかし、以下の展開例のように、あえて「未知の未知」（知らないということに気づいていない）や「既知の未知」（知っているにもかかわらず、そのことに気づかない）を探究する課題に取り組むことで、同様に異なった思考モードを体験できるのではないだろうか。

14. 4. 創造性リテラシーに挑む

創造性をどのように学び、どのように伝えるのか。この「創造性リテラシーの問題」は、いつの時代にも解決の糸口すら見つけることが困難な問題であった。著者は、これまでの論考を踏まえて、絵、言葉、矛盾、対話などの様々な手段や方法を駆使しながら、想定外問題を考えるという講義を実践してみた。例えば、「無（ゼロ）に無限の可能性があることを示せ。その答えを、図示せよ」。「ニューヨークの治安がこの 30 年程で、著しく改善した。どのような方法を使ったか考察せよ。その方法の一般化を検討せよ」といった課題を提示する。そして、それらの課題に対して、次の講義で発表してもらい解説を加えながら、さらに議論を重ねる。

この講義の目的は、単なる知識の獲得ではない。第一に、事象を可能な限り異なる視点から眺められるか。第二に、ある事象に関する学びが、別の事象の学びへと「転移」できるか。すなわち、「学習の転移」を通して、異なる事象に統一的な理解を深めることができるか。第三に、こうした実践経験を重ねて、様々な事象を理論的に理解することで、独自の解釈を提示できるか、ということである。

以下では、二つの具体例を紹介する。

一つ目は、京都大学全学共通セミナーである。これは、2020 年 5 月初旬から 7 月末日までの毎週火曜日に実施した。1 回生の女子学生が最終講義後に、次のレポートを提出した。

「私たちが二項対立的に認識している項目の中間の曖昧な部分には無限の可能性が秘められており、私たちは、固定観念によってそれを見落としてしまっているのだ。そして、この中間の不安定な状態に問題のヒントが隠れていることがあると知り、一連の授業を通して、二項対立で見落とされる不安定な中間部にもっと焦点を当てていくべきだと感じた。」

このレポートには、これまでの二項対立的な考え方に対して、その「あいだ」を考えようとする新たな観点への転換が明瞭に現れていた（前編、脚注 1）。ここで強調すべきことは、講義では二項対立やその「あいだ」について直接的に説明したのではなく、具体的かつ抽象的な問題を多様な観点から捉えるという試みを毎回の課題で繰り返しただけであった。これは、画家が用いる「純粹輪郭画のパラドックス」の方法に近いかもしれない。なぜなら、画家にとっては、純粹輪郭画を描くことは‘目的’ではなく、「ものの見方」を変容するための‘手段’に過ぎなかったからである。同じように、講義で毎回出した課題は、その課題解決が‘目的’ではなかった。そうではなく、「ものの見方」を獲得するための‘手段’であった。こうして、伝えたい知識を直接伝えるのではなく、自らが発見するように導くことができたのである。

二つ目の実践例として、立命館大学理工学部・集中講義の留学生の学びに着目する。タレブ（2009）は言う、「歴史や社会は流れていない。ジャンプする」と。講義も同じである。想定通りの展開にはならない。良くも悪くも、ジャンプする非連続現象である。2020 年 8 月 31 日から 9 月 4 日まで集中講義をオンラインで実施した。中国からの留学生が最終講義後にレポートを提出した。

「この授業を通じて、私は多く変わりました。最初の変化は、迷いました。正直にいうと、分かったことより、分からなくなったことの方が多い。従来までの授業は基本受けたら、何かの定理とか、公式とかが把握できましたが、この授業で何か定理を勉強しましたかと聞かれたら、私ははっきり言えません。定理というより、物を見る方法を勉強しました。」

本人が述べたことは、はじめは‘迷い’ばかりであったが、その後、「ものの見方」について学びが深まったと振り返っている。しかも、その変化を中国の詩を次のように引用して説明している。「私の出身地の中国には、ある詩があります。簡単に翻訳すると、‘山の本体が見えない、それは山の中にいるからだ’。それと同じように、問題が解決できないときに、問題から離れ、次元を変え、立場を変え、新たな結果が出るかもしれません。」この点で、一つの課題の学習を新たな課題の学習に「転移」することを自得していると言える。

15. 如何にして心は心を知りうるか——習慣的な思考パターンからの解放——

ギリシャ時代以来、西洋哲学は抽象的な理論構築だけで真理の探究を試みてきた。西洋科学が支配的なあまり、「心とは何か」、「身体とは何か」、「世界とは何か」と問い、それらの問いについてもこれまで通りの二項対立的論理にしたがって探究してきた。心を知るための方法として、物質を理解するために使われていた方法である理性を採用してきたのである。理性を批判する必要に迫られた時でさえ‘理性’に頼ってきた。心と身体、あるいは世界との関係は固定されていて、変えることができないと考えてきたのである。

理論生物学者のフランシスコ・ヴァレラ（2001, 324 頁）は次のように指摘する。「現代の西洋的な考え方では、自己や世界の基盤が欠如していることをまったく表現できない。・・・これは、客観主義と主観主義の中道に対する方法論上の基礎がないためである」。2000 年に提唱した「自己・非自己循環理論」（村瀬、2000）は、主体である「自己」と客体である「非自己」の循環を基盤とした‘超二元論’的な方法論である。この理論では、自己の「内」に、「自己」と「非自己」の循環的相互作用（当事者である主体が相手である客体に問答し合う主客共創過程）が包含されている（前編、図 15 上段、中段参照）。その結果、新たな次元が‘弁証法’的に創発する。それは、新たな‘意味’や‘価値’の生成に繋がる。この客観的・主観的過程が、心が心を知りうる方法論と言えるのである。

インドの伝統では、哲学は単に抽象的な営為ではなかった。‘悟り’と結びついていたのである。その‘悟り’とは、特定の状態に到達することが目的ではない。心を自然の成り行きにまかせられるように心を静め洞察を深めていく‘過程’——すなわち、心の変容という‘過程’——が目的である。この心の変容可能性を介して、心が心を理解し得る。なぜなら、変容を通して‘自然体’で見ることができるようになった心によって、はじめてつかみ取ることができる観察事実こそ‘真理’と言えるからである。この変容の本質は、理論や先入観、あるいは抽象的考察によって、自身の経験に「ついて」思考を駆使する態度からは探究できない。なぜなら、その態度から解放されることが必要であり、その場合に限って、自身の経験そのもの「である」という状態に到達することができるからである。先に述べた「純粹輪郭画」の働きも、この種の変容をもたらす‘手段’であった。この変容は、当事者自身が自覚的に「わかる」だけでなく、他者にもそれと「わかる」。なぜなら、活力が吹き込まれているその‘ゾーン’とも呼べる状態の挙動は、正確さや美しさが並外れているからである。

*****【コラム 11：フロー経験と卓越した技】*****

『楽しみの社会学』（2007）を著したミハイ・チクセントミハイは、ハンガリーの外交官を父としてイタリアに生まれた。ローマでジャーナリスト、芸術家として活動した後、社会学、人類学、心理学など幅広い学問を学んだと言う。自らがロッククライマーであり、チェスや絵画にも秀でるといふ多彩な才能の持ち主である。その自らの体験を踏まえ、遊びに典型的に見られる楽しい経験の没頭、すなわち、フロー経験に興味を抱き、研究を開始した。チクセントミハイは、「特異でダイナミックな状態——全人的に行為に没頭している時に人が感ずる包括的感觉——」をフロー（flow）と呼ぶと述べている（M.チクセントミハイ『楽しみの社会学』新思索社, 2007, p.66 より）。

フローの状態にある時、行為は行為者の意識的な仲介の必要がないかのように、内的な論理に従って次々と進んでいく。人はそれをある瞬間から次の瞬間への統一的な流れとして経験し、その中で自分の行為を制御しており、更にそこでは自我と環境との間、刺激と反応との間、過去現在未来との間の差はほとんどない。

しかも人はフローをいかなる活動においても、例えば戦場、工場での流れ作業、または共生収容所などでの、およそ楽しさとは無縁と思われる活動においてすら経験し得る。

（前掲書, p.66）

この「自我と環境との間、刺激と反応との間、過去現在未来との間の差はほとんどない」という状況は、禅やヨガ、その他の瞑想などの宗教的体験についても言えることであると言う。なぜなら、フローの最も明瞭な特徴は、行為と意識の融合だからである。ロッククライマーは、次のように自身の体験を述べている。

すっかり夢中になっているために、自分が自分であるという意識がなくなり、岩の中に溶け込んでしまうのです。

禅が精神の集中であるように、これは瞑想のようなものでしょう。やらねばならないただ一つのことは、心を一点に集めることです。何者かに到達するために精神の焦点を結ばせる能力が大切です。（前掲書, p.76-77）

このことは、道元の求めている世界観ともつながる。それは、積み重ねられた行為の到達点のなかに、その行為の動機も、目的を達成するための修練も、そうして得られた智慧も、すべてが渾然一体となって、そこに生き生きとした世界がひらけ、きわめて自然に、おのずからに、そういう世界に入り込んでいる自分を発見することだからである（岩田慶治『道元との対話』講談社学術文庫, 2001, p.82）。実際に、フロー経験において、リスクと隣り合わせの状況の中で、卓越した技を駆使している人は、自然の中に自分が溶け込み、一体化している感覚を抱いているのではないだろうか。それは、卓越した技であると考えられる。

16. 曖昧さところの構造——癒しと学びに欠かせない発見科学の視座

本節では、数学をはじめとする科学の発見過程で重要な役割をになってきた発見科学が、日常生活でも不可欠である点を、二つの異なる実践について論考したい。

16.1. 芸術における曖昧さと人間の精神構造

パブリック・アートを実践するアーティストである たほ りつこ（田甫律子）氏は、曖昧さ（ambiguity）の意味について、次のように述べている（『あいまいの知』河合隼雄&中沢新一編, 岩波書店, 2003）。

曖昧さには、前提に単一あるいは複数の意味の枠組み設定があり、表現の意味するところは多義的でも、それぞれの文脈の枠組み自体はかなり明確に示されているものです。アートに設定された枠組みが脆弱な場合、「不明確（vague）」という言葉が使われます。枠組みがあるかも知れないけれども、語りきれず、ぼんやりと見え隠れするだけの場合は「不明瞭（obscure）」です。前提の枠組みがあると推測されるけれども、ほとんど語られない場合には「神秘（mystery）」「神秘的（mysterious）」という言葉です。その最小限のヒントは、ある種の魅力をたたえていますから魅力的だという意味と共に、もう一方には、訳のわからない深い淵に落ちる恐れや警戒のニュアンスでも使われます。明らかに枠組みがない状態は「混沌（chaos）」です。それと似て異なるのが、無秩序（disorder）や混乱（confusion）で、ものごとがあり、それぞれの枠組みや秩序が乱れ、脈絡を失った断片が錯綜する状態です。これらは、作品が表現になっていない場合もあれば、アーティストが意図的に用いて作品に迫力を加えることもあります。アートの表現で混沌（chaos）についての表現があったとしても、それ自体が混沌（chaos）でありうるかどうか、興味のあるところです（p.200）。

「曖昧」な状態を平面上、図式的に考えるなら、例えばAという枠組みからは①Aである。②Aでない。という二つの意味とイメージが設定されます。曖昧な状態というのは、ある事象が同時にAであり、Aでもない、ということ、「ある」と「ない」が、同時に成立するという状態です（p.202）。

以上のたほ氏の述べるアートにおける曖昧さの概念について、図示を試みると以下のようになる。すなわち、アートに設定された枠組み設定がある「曖昧」（図 1-1）、枠組み設定が脆弱な「不明確（vague）」（図 1-2）、枠組みがあるかも知れないけれども、語りきれず、ぼんやりと見え隠れするだけの「不明瞭（obscure）」（図 1-3）、前提の枠組みがあると推測されるけれども、ほとんど語られない「神秘（mystery）」/「神秘的（mysterious）」（図 1-4）、明らかに枠組みがない「混沌（chaos）」（図 1-5）である。

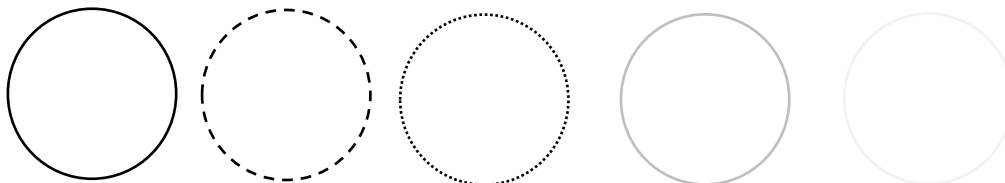


図 1-1 曖昧 図 1-2 不明瞭 図 1-3 不明確 図 1-4 神秘/神秘的 図 1-5 混沌

実は、人間の精神構造について、精神疾患である統合失調症の自我境界の状態を想定して図示してみると図2のようになる（阿保, 2013）。

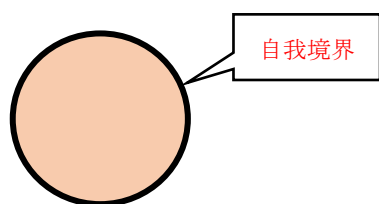


図 2-1 病気を抱えていない人の通常精神構造

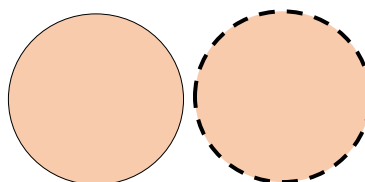


図 2-2 統合失調症慢性期の精神構造

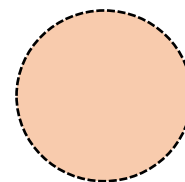


図 2-3 統合失調症急性期の精神構造

フロイト（1923）による心の構造を前提として考えてみると、自我は超自我と欲動の間で折り合いをつける役割を担う。精神疾患を抱えていない人の自我境界は明瞭で弾力性がある（図 2-1）。そのためにストレスに直面しても自我を保つことができる。しかし、自我境界が点線のように脆弱な人は、ストレスとなる環境の変化によって統合失調症が発症する（図 2-3）。そのために、妄想や幻聴、思考吹入といった症状が生じ、自己の外側からさまざまな思考が入り込む。また、自己の内側の思考が外に漏れだし、思考奪取、思考伝播、思考化声といった症状を呈する。このことによって自己存在が揺らいでしまうのである。治療過程は、自我境界の内外に保護膜を作ることによって自我の解体を護ることから始める。保護膜には、隔離室やヘッドフォン、引きこもり行為などがある。それらと共に、自己肯定感を高める承認のケアを行い自我境界の強化を図る。その過程で、自我境界は破線となり（図 2-2 右）、次第に実線となり（図 2-2 左）、さらに実線が太くなって弾力性が増す（図 2-1）。このように図示してみると回復過程を理解しやすい。

以上のように図示してみると、アートにおける曖昧さについての枠組み設定との関係と、心の病の回復過程は類似していると捉えることができるのではないだろうか。そして、ある事象が同時に A であり、A でもないということ、「ある」と「ない」が同時に成立するというパラドックスが同時に成立する曖昧さの関係は、健康と病の関係についても同様の関係と捉えることができる。健康の中に病があり、病の中に健康があり、それらは循環するからである。

16. 2. 相談とコンサルテーションの相違

西平直氏の論考「問い直しのエチュード」(特集収録)に、劇作家・演出家・藝術治療教育家である川手鷹彦氏が主宰するワークショップの一コマが描かれている。ワークショップの参加者であるカウンセラーの「どうしたらクライアントを助けることができるのか」という質問に対し、「助けることはできない。助けることができると思うのは傲慢だ」と言い放ち、「クライアントから学ばせてもらう。そこが原点だ」と語ったと言う。

実は、医療・看護ケアにおいても、川手氏の考え方が原点である。医療者は治療やケアを一方的に行うのではない。どのような治療やケアを行っても助けることができない場合もある。それどころか、医療やケアの受け手である患者から学ばせてもらうという姿勢で関わる過程で、患者と共に医療者も成長する。回復する力は、患者自身が有しているからである。その自然治癒力・回復力(レジリエンス)を充分発揮できるように、患者を取り巻く環境を整えることが医療・看護ケアである。

この患者の自然治癒力・回復力を活かす支援は、以下の、コンサルテーション過程においても同様である。

看護において高度実践看護師と称される専門職の一つに専門看護師という職種がある。看護の専門分野において5年以上の臨床経験を有し、大学院修士号の学位を取得した上で資格試験に合格することを条件として認定される。専門看護師の役割機能には、コンサルテーション、教育、研究、調整、倫理調整、直接ケアの6機能がある。臨床現場で、様々な職種を含むスタッフからの相談に対応し、院内の新人教育や看護研究を支援する。また、多職種間の調整や、緩和ケアにおける倫理的課題について家族を含む医療者間の調整を行う。そして、必要に応じて、ロールモデルとして直接ケアを実践するのである。これらの6機能は、独立しながらもそれぞれ関連し合っており、切り離すことは難しい。しかし、6機能の中で、まずは専門看護師活動の入り口となるのがコンサルテーション機能である。

Consultation は、日本語では「相談」と訳されるために、カタカナで表記する「コンサルテーション」との区別がしにくく、同じものと捉えられている現状がある。しかし、実は、「相談」と「コンサルテーション」には大きな相違がある。「相談」の場合は、相談者(コンサルティ)の相談内容に対し、専門看護師(コンサルタント)が専門家のアドバイスという形で回答する。このやりとりを繰り返しているうちは、いつまでも専門看護師(コンサルタント)に依存しなければならない。一方、「コンサルテーション」では、コンサルティの持っている力を活用しながら、共に課題を整理し、コンサルティ自身で回答を見つけることができるように多側面から支援する。その過程がコンサルテーション・プロセスである。この過程で、コンサルティは、自分の持つ力を自覚しながら、自律的に解決の方向性を模索する。一旦、このような過程を踏むことができれば、徐々に、周囲を巻き込みながら自律的な問題解決を目指すことができる。このようなコンサルテーション・プロセスは、カウンセリング、医療・看護ケア、そして教育など、さまざまな分野の基本過程と言えるのではないだろうか。

17. 本稿を終えるにあたり

2022年4月15日、筆者の一人は高校生向けの京都大学特別講義を実施した。自身の「変容」を介して、世界を知り、自己を知りはじめている様子が伝わってくる。多数寄せられた感想から、二つだけ紹介したい。

「未知」には、「知らない」ということを知らない状態の、「未知の未知」と、「知っている」ということを知らない状態である、「既知の未知」があると聞いて、私たちが現在直面している問題の中にも、その解決方法を知っているのに、そのことを私たちが知らない、ということもあるのではないかと思った。また、上手くいっているからこそ見落としてしまっていることがあり、それが大惨事の原因になり得る一方で、そこにイノベーションの出来る領域があるときいて、私たちの日常生活の中で一見上手くいっていることの中に何か穴がないか、観察してみようと思った。

先生が90分の講義が終わった後に私たちが変わっていて欲しいと仰っていた。今講義が終わり、何か生きる勇気が湧いてくるような感じがする。・・・既知の未知についての話が印象に残っている。既知の未知とは、知っているはずなのに見落としていることだ。私たちは普段奇跡なんて起こらないと思っているが、人類史のスケールで考えれば、直立二足歩行をしていることが奇跡だと、先生は言った。そう考えれば、私っているより凄くないかと思えるようになった。

何よりも嬉しいことは「学び」が単なる知識の獲得ではなく、対象を様々な視点から見るとともに、自身の問題と結び合わせながら、自身の「変容」を捉えるとともに、実践に向けた意欲がわいてきていることである。90分という限られた時間の講義であるが、受け手の解釈を介して、その内容が新たな「生命」を得て展開していくことが期待できる。

本論考を終えるにあたり、次の言葉で締めくくりたい。

「未知の未知」と「既知の未知」に我が身を委ねることができることが、混沌として答えない世界を幸せに生き続ける秘訣ではないだろうか。その時こそ、問題も答えも、当事者が自らの力で見出し続けていくことができるに違いない。その際に必要となる“儀式（の道具）”が、仏教修行と日々の営み（第10節）であり、ネガティブ・ケイパビリティ（第11節）であり、スタニスラフスキー・システム（第12節）であり、翻訳作業（第13節）であり、純粹輪郭画（第14.2節）や「逆さまの絵を描く方法」（第14.3節）に代表される教育現場での実践だったのである。実は、私たちが感知できる世界ばかりでなく、目に見えない世界、聴くことのできない「沈黙の世界」、あるいは「雑音」さえも、一面化していた「ものの見方」を根源から変革する“儀式”だったのである。目標は、すでに足下にあった。その気づきが、混沌とした世界を幸せに生き抜くために私たちが見出すべき智慧に違いない。

文献

- アリエティ、シルヴァーノ（1995）『創造力——原初からの統合』加藤正明訳 新曜社
- ヴァルシナー、ヤーン（2013）『新しい文化心理学の構築：〈心と社会〉の中の文化』、サトウ・タツヤ訳、新曜社
- ヴァレラ, F., トンプソン, E., ロッシュ, E.（1991）『身体化した心——仏教思想からのエナクティブ・アプローチ』田中靖夫訳、工作舎、2001
- エドワーズ、ベティ（1988）『内なる画家の眼——創造性の活性化は可能か』北村孝一訳 エルテ出版（原著；1986年）
- クーラント、リチャード、ロビンズ、ハーバート（1966）『数学とは何か』森口繁一監訳、岩波書店
- クーン、トーマス（1971）『科学革命の構造』中川茂訳、みすず書房
- シャーマー, C. O.（2010）『U理論——過去や偏見にとらわれず、本当に必要な「変化」を生み出す技術』中土井僚、由佐美加子訳、英治出版
- スタニスラフスキー、コンスタンチン（2008）『俳優の仕事 第二部—俳優教育システム』堀江新二、安達紀子訳、未来社
- チクセントミハイ, M.（2007）『楽しみの社会学』改題新装版、今村浩明訳、新思索社（原著 1975年）
- ディーコン、テレンス・W.（1999）『ヒトはいかにして人となったか——言語と脳の共進化』金子隆芳訳、新曜社
- デボノ、エドワード（2015）『水平思考の世界』藤島みさ子訳、きこ書房
- ブランバーク, M. S.（2005）『本能はどこまで本能か——ヒトと動物の行動の起源』塩原道緒訳、早川書房、2006
- フロイト、ジグムント（2007）『フロイト全集 18』岩波書店（原著 1923年）
- ヘリゲル、オイゲン（1981）『弓と禅』稲富栄次郎、上田武訳、福村出版
- ポリア, G.（1954）『いかにして問題をとくか』柿内賢信訳、丸善出版
- リードル、ルーペルト（1990）『認識の生物学—理性の系統発生史的基盤』鈴木達也、鈴木洋子、鈴木直訳、思索社
- ローゼン, D.（2000）『うつ病を生きるために —夢と描画でたどる魂の癒し—』横山博監
- ロジャーズ、ナタリー（2000）『表現アートセラピー ——創造性にかかれるプロセス』小野京子、坂田裕子訳、誠信書房（原著 1993年）
- ローレンツ, K.（1974）『鏡の背面——人間的認識の自然史的考察』谷口茂訳、思索社（原著 1973年）
- ミラー, G.（1997）『ことばの科学—単語の形成と機能—』東京化学同人
- パウリ（1976）「元型的観念がケプラーの科学理論に与えた影響」『自然現象と心の構造』（C.G. ユング、W.パウリ）、163-164 頁
- ユング, C. G.（1987）『タイプ論』（林 道義 訳）みすず書房（原著 1921）

- ユング, C. G. (1999) 『元型論』 (林 道義訳) 紀伊國屋書店 (原著 1946)
- ウォーコップ, オズワルド (1984) 『ものの考え方—合理性への逸脱』 深瀬基寛訳、講談社
学術文庫
- 秋月龍珉「意識と無意識—禅仏教の「無心」論と西田哲学の「場所的逆対応」の理論」、『複雑なシステムにおける情報—情報：生命的関係を自己組織するもの—』に関するシンポジウム 1988.4.24.—4.26. 報告書 117—128 頁 総合研究開発機構・トヨタ財団、1989
- 阿保順子 (2013) 『精神看護という営み』 批評社
- 安孫子誠也 (2006) 「アインシュタイン来日への道」 湘南科学史懇話会
<http://shonan-kk.net/20060304ppt.pdf>
- 板倉聖宣『科学の学び方・教え方』 太郎次郎社、1975
- 板倉聖宣『仮説実験授業のABC』 仮説社、1977
- 岩田慶治 (2001) 道元との対話 ——人類学の立場から、講談社学術文庫
- 河合隼雄 (2003) 「序 曖昧さと「私」」 1—15 頁、河合隼雄、中沢新一編 (2003) 『あいまいの知』 岩波書店
- 九後太一 (2006) 「中間子の予言——湯川秀樹生誕百年」 数理科学 44, 19-24 頁
- 西田幾多郎 (1984) 『日本の名著——西田幾多郎』 中央公論社
- 畑村洋太郎 (2022) 『新 失敗学——正解をつくる技術』 講談社
- 藤澤理恵 (2019) 「変化の時代における「学び」の理論」
<https://www.recruit-ms.co.jp/issue/feature/0000000794/?theme=hrdepartment>
- 松長有慶「マンダラに見る内と外」、『複雑なシステムにおける情報—情報：生命的関係を自己組織するもの—』に関するシンポジウム 1988.4.24.—4.26. 報告書 134-144 頁 総合研究開発機構・トヨタ財団、1989
- 村瀬智子 (2009) 「“自己・非自己循環理論”を基盤としたうつ病をもつ人に対する看護援助モデルの構築」、千葉大学大学院看護学研究科博士論文
- 村瀬雅俊・村瀬偉紀・村瀬智子「学びと遊びの原点に迫る—自己・非自己循環理論の視点から」
Journal of Quality Education Vol.8, 23-52, 2017
- 村瀬雅俊・村瀬智子 (2020a) 「大統一生命理論への挑戦——自己・非自己循環理論の展開」 3—79 頁、山極壽一・村瀬雅俊・西平直 編『未来創成学の展望——逆説・非連続・普遍性に挑む』ナカニシヤ出版
- 村瀬雅俊・村瀬智子 (2020b) 『未来共創の哲学——大統一生命理論に挑む』言叢社 1-350 頁
- 村瀬雅俊・村瀬智子 (2022a) 「未来共創の哲学——「自己・非自己循環理論」の提唱から、「大統一生命理論」の構築」 京都大学大学院文学研究科紀要 『日本哲学史研究』 特集 「日本哲学と科学」 第 18 号, 62-117 頁
- 村瀬雅俊・村瀬智子 (2022b) 『歴史としての生命 増補版 —— 自己・非自己循環理論の構築』
ナカニシヤ出版、1—428 頁
- 村瀬智子・村瀬雅俊 (2021) 『未来から描くケア共創看護学——自然・生命・ころ・技の循環』

- 大学教育出版、1－320 頁
- 高橋和巳（1997）『心を知る技術』筑摩書房
- 谷川幸雄（2002）「発見学習の基礎理論と実際」北海道浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要, 169－185 頁
- たほ りつこ（2003）「曖昧さと芸術」『あいまいの知』河合隼雄、中沢新一編、199-220 頁、岩波書店
- 梁瀬義亮（1998）『生命の医と生命の農を求めて』地湧社
- 山極壽一（2020）第 14 章「人類の終焉は物語の消滅と共にやってくる」321－331 頁、山極壽一・村瀬雅俊・西平 直 編『未来創成学の展望——逆説・非連続・普遍性に挑む』ナカニシヤ出版
- 頼住光子（2004）『正法眼蔵入門』角川ソフィア文庫
- Jantsch, E. (1980) *The Self-Organizing Universe: Scientific and Human Implications of the Emerging Paradigm of Evolution*, Systems Science and World Order Library. Innovations in Systems Science, Pergamon, p.32,
- May, Robert, M. (1976) “Simple mathematical models with very complicated dynamics” *Nature*, vol. 261, 459–467
- Murase, M. and Murase, T. (2022) Transdisciplinary Study of How to Integrate Shattered World: The Self-nonsel self Circulation Principle of “Living” Wholeness, The Kyoto Manifesto for Global Economics II: Reaching the Circle of Wholeness, Ch.7 (Eds: Stephen Hill, Stomu, Yamash’ta, and Tadashi, Yagi) Springer-Nature
- Nicolescu, Basarab (2017) The Bootstrap Principle and the Uniqueness of the World, *Cybernetics and Human Knowing*. Vol. 24, no. 2, pp. 83-88
- Wolchover, Natalie (2017) Physicists Uncover Geometric ‘Theory Space’, *QUANTA magazine*, February 23
- van der Leeuw, S.E. and Murase, Masatoshi (2021) Chapter 21: Ignorance, Creation, Destruction, In: Creative Complex Systems (Eds: Kazuo Nishimura, Masatoshi Murase, Kazuyoshi, Yoshimura) Springer-Nature, pp.351-372